

福井県文書館講演

## 他国修行－福井藩教育改革の軌跡－

熊澤 恵里子\*

はじめに 福井藩の教育の特色 = 「他国修行」

### I 藩士・子弟の他国修行

1. 他国修行のはじめ
2. 他国修行の制度化
3. 他国修行のすすめ
4. 沼津兵学校への遊学
5. 他国修行の実態

### II 藩主の学問修行

1. 松平慶永（春嶽）の学問修行
2. 慶永孫、松平康<sup>やすたか</sup>莊の農学修行

おわりに－世代を越えて引き継がれる他国修行の精神

みなさまこんにちは、ただいまご紹介いただきました熊澤と申します。本日はお寒い中お運びいただきまして誠にありがとうございます。2時間ほどになりますが、どうぞよろしく願いいたします。東京都出身ということでご紹介いただきましたけれども、私が初めて福井に参りましたのは、大学院の修士課程2年生の時に、以来20年間、おそらく年に最低1回あるいは2回、来ておりますので、福井は私の第二の故郷と言ってもよろしいのではないかと考えております。今年のような大雪は私も初めてですが、今朝は東京の方でも雪が降っているということです。本日は、福井から他所へ出て修行をする「他国修行」のお話をいたします。今でこそ新幹線を使って4時間余りで東京から福井に来ることができますが、鉄道がなかった時代は本当に地理的にも一大事、外に出るのもこちらに来るのも一大事ではなかったかと思えます。福井藩の教育改革については、三上一夫先生のご研究をはじめ、『福井県教育百年史』、『福井県史』、『福井市史』の中で紹介されておりますので、本日は、私の方では福井藩の教育改革と連動した他国修行の実際についてご紹介していきたいと思えます。福井の他国修行が、福井の近代化、教育・文化・産業の振興に重要な役割を果たしたということをじっくりお話ししたいと思います。

なお、本日はパワーポイントを使ってお話をさせていただきます。皆様に配布いたしましたプリントを元にお話をいたしますのでご覧下さい。本日はお話しする前半では、藩士子弟の他国修行として、

---

\*東京農業大学教授

幕末に海防警備を契機として福井藩の他国修行が始まったことをご紹介します。橋本左内の時代に制度化され、さらに明治に入ると他国修行が組織化されます。藩の奨励もあって他国修行は明治維新後、非常に普及します。なかでも福井藩の教育改革に大いに影響を与えました、沼津兵学校への遊学について当時の生徒が写した数学ノートをスライドでご紹介したいと思います。また後半では、藩士の学問修行として、松平春嶽さんの孫の<sup>やすたか</sup>康荘さんについてご紹介いたします。康荘さんはドイツ留学へ旅立ったわけですが、その後なぜかイギリスに渡って農学の修行に励むことになります。その経緯について、写真を交えながらご紹介したいと思います。

本日ご紹介いたします史料は、福井県立図書館保管の松平文庫、福井市立郷土歴史博物館寄託の<sup>えつ</sup>越葵文庫が中心となっております。また本日の他国修行の話は、私の本『幕末維新期における教育の近代化に関する研究—近代学校教育の生成過程』の第2章・3章・4章がベースとなっております。拙著は、初版はおかげ様で1年もたたないで売り切れまして、第2版が2008年（平成20）に出版されました。出版社は風間書房ですが、2007年（平成19）に初版を出したときに、15,000円もしてあまり売れないだろうと予定より少なく印刷していたようです。第2版では、初版でつけました正誤表を本文の中で綺麗に直すことができました。福井県立図書館、福井市立図書館にも寄贈させていただいております。その後また、史料が読めなかった所など、後で直さなければいけないところがぼつぼつと出てきておりますけれども、次に改訂版を出す機会があれば、手直ししたいと思います。後半にご紹介する松平康荘さんの英国農学修行については、拙稿が2009年（平成21）の英学史学会紀要に掲載されましたので、ご参照ください。

## はじめに 福井藩の教育の特色＝「他国修行」

福井藩の教育は第16代藩主松平慶永、春嶽さんの時代に飛躍的な発展を遂げます。春嶽さんが力を入れたのは藩校の教育でした。福井では正義堂という学校がありましたが、あまり盛んではなく、天保5年（1839）には廃校になりました。そこで春嶽さんの時代に明道館が創設されるわけですが、藩校創設に至る経緯については、昨年出版された舟澤茂樹先生の『シリーズ藩物語 福井藩』に横井小楠<sup>しょうへい</sup>招聘に至る経緯も含めて、非常にわかりやすく解説されております。舟澤先生がご著書の中で紹介されていますように、春嶽さんの優秀なブレーンの下で着々と福井藩政改革が進められ、藩校改革もそれと連動した改革であったために、藩士子弟の間に藩校教育が速やかに浸透していったものと考えます。明治維新後の福井藩校明新館の改革は、他藩に比べても非常に進んだ内容でした。福井藩の教育の特色としては、「他国修行、文武学校（軍事教育）、普通ノ学、四民平等、文武ノ解職」の5つにまとめられます。この中でやはり他国修行が一番大きな役割を担っていたと考えます。他国修行者が持ち帰った知識と情報によってさらに藩校を改革する。福井藩は教育への投資を惜しみませんでした。そして文武の教養としての「普通ノ学」の修得を、中学生に義務付けました。「普通ノ学」というのは、後でご紹介しますように、数学とカル化学の基礎、英語などの洋学だけではなく、和学・漢学の科目、さらには実用的な科目も含まれておりました。このようなバランスの取れた学問修行によって、福井藩は廃藩置県後、理数系のみならず、多くの多才な人材を全国に輩出したということになります。

## I 藩士・子弟の他国修行

### 1. 他国修行のはじめ

福井藩の他国修行はいつ頃から始まったのでしょうか。史料1をご覧ください。「文久年間始メテ」とありますが、実際、藩命による遊学の記録というのはさらに古くて、弘化4年（1847）7月までさかのぼる事ができます。それが史料2になります。史料中、「海防并武備」とあるように、福井藩では弘化4年7月の海防警備をきっかけとして、西洋砲術修行に取り組むことになりました。西洋砲術の第一人者として知られていた高島秋帆<sup>しゅうはん</sup>の弟子下曾根金三郎のもとへ、武術師範役西尾源太左衛門親子を筆頭に多くの家臣を送り込んでいます。これはペリーの来航より前のことですが、すでにロシア船が択捉<sup>えとろふ</sup>に来航し、フランス船も琉球に来航しています。また、弘化2年（1845）にはアメリカの捕鯨船が浦賀に来航しており、相次ぐ外国船の来航により、諸藩の対外的な危機感というのはかなり高まっていた時期ではないかと思えます。

このように福井藩では西洋砲術修行に力を注ぐ一方で、文武医術修行も奨励しております。嘉永4年（1851）には、文武医術修行のために手当金として、毎年金500両を藩の財政から用意するように依頼しております。嘉永4年というとジョン万次郎がアメリカ船に送られて琉球へ上陸した、そういう年です。他国修行に藩のお金を支出するということは、春嶽さんの英断ではなかったかと思えますが、春嶽さんのもとで進められてきた厳しい儉約策を考えれば、他国修行への投資は、非常に大きな決断であったといえましょう。

### 2. 他国修行の制度化

それでは、史料3をご覧ください。おそらくこれが福井藩の最初の他国修行の規定であると考えます。安政4年（1857）4月に出された文書になります。他国修行は手当金が規定される以前は、すべて私費によるものでした。安政4年以前の文学修行や医術修行の記録が残っておりますが、家業が医者の方が多く、その他は趣味のための修行がほとんどで、身分的にも恵まれたごくわずかな者にしか開かれておりませんでした。その意味では福井藩の文武医術修行の奨励と藩費の支給は士分だけではなく、その下の卒へも遊学の機会を与えたという点で、高く評価できると思えます。

他国修行の手当金については、安政4年5月に福井藩明道館の学館心得であった橋本左内がさらに詳細な規定を提案しています。史料4をご覧ください。この計画案というのは『橋本景岳全集』の上巻におさめられております。他国修行には依命と許可の2つがあります。依命、つまり藩命によるものについては半年または1年の時間をかけて審査し、15歳以上で将来有望な者へは定額2人扶持を与えたとしました。書籍購入や機械製作などの費用は審査によって無利息拝借または藩が買い上げることが決定します。以後、藩命による遊学者はほとんどが何らかの手当金を藩から支給されております。平均的な修行では、修行が命じられた時点で金1枚が給付され、修行時あるいは帰藩後に扶持米三人扶持あるいは増扶持が認められます。手当金の最高額は兵学と航海術が一番高く、扶持米も加増されていることから藩の期待が伺えます。しかし、維新後は財政難がすすみ、緊縮財政ということもあって、手当金の金札10両を帰国後の審査いかんによって現金化するというような支給方法も取られていたようです。

表1をご覧ください。幕末における私塾への他国修行として、蘭学塾・兵学塾への遊学の一部をまとめました。各リストの上の方に福井藩の修行者を並べまして、太線を入れて、その下に福井藩以外の福井地域の修行者を並べております。まず、華岡青洲の春林軒には、岩佐玄珪や橋本左内が学びました。青洲はドイツ人外科医に学んだ紀州の医者で、世界初めて麻酔を用いて手術を行ったことで知られています。シーボルトの弟子の伊東玄朴には、<sup>なからいげんちゅう</sup>半井玄冲が学んでいます。それからオランダ人のニーマンのもとで修行した緒方洪庵の適塾へは、橋本左内も入門しています。これは他国修行の特徴の一つですが、左内のように優秀な者は、複数の塾を渡り歩き研鑽を積んだということがわかります。他藩では、佐野常民などもその一人です。遊学が藩を越えた知識人のネットワークを形成していたという意味でも、橋本左内は藩から将来を期待された人材であったことがわかります。

緒方洪庵の適塾へは福井藩以外にも、大野藩から6名、鯖江藩から4名、勝山藩から2名、丸岡藩から1名修行に出ていたことが確認できます。橋本左内は佐久間象山の象山塾でも学んでいます。象山塾へは大野藩から29名と、大量に送り込まれているというのも大きな特徴です。おそらく彼らが、のちの大野の洋学館、大野の洋学を担う人材として活躍したのではないかと思います。兵学に関しては、緒方洪庵の弟子大村益次郎の鳩居堂にも福井から修行に出ています。

文久2年(1862)になると、高野長英の弟子で、長崎で緒方洪庵と同じくニーマンの下で医学を学んだ<sup>たいぜん</sup>佐藤泰然へ大勢入門しています。泰然の佐倉順天堂は、天保14年(1843)に開設されています。佐藤泰然の次男(松本良順)はポンペに学んでいます。

### 3. 他国修行のすすめ

福井藩は明治維新後になると、後でご紹介いたします沼津兵学校のように藩費を使って組織的に藩士子弟を送り出す一方で、私費遊学についても規則を定め奨励しました。史料5をご覧ください。私費の他国修行規定の第一項目で、年齢20歳以下の者は原則的に「普通之学」の修行が義務付けられました。これが大きな特徴です。ただし得意な一科のみを勉学することも可能で、個人差についても配慮されています。修行中は3ヶ月ごとに修行先の学校規則や試験について、藩校明新館まで詳細に報告するよう指示され、帰藩した際には試験を受けることが課せられました。おそらくこれは、学業の到達度を確認するためで、そのノルマを課すことによって、遊学中いっそう勉学に励むよう仕向けたのでしょう。成績優秀者は希望により、再遊学が許されます。このような遊学に際しての詳細な規定は、実力主義を徹底し、学習者自身の学問による立身出世主義を満足させるものであったといえます。他国修行後、福井へ帰藩し、家格ではなく実力により役職につき給料を貰う、というシステムは、他国修行の中心であった中級士、下級士の勉学熱を一層高めることになったと思います。

また他国修行は、他藩の情報収集の他に、同門の親睦を深めるというなどさまざまなネットワークを形成する大きなチャンスだったといえます。先ほどご覧いただきました表1の他にも、幕末には広瀬淡窓の<sup>かんぎえん</sup>咸宜園での漢学修行、それから平田篤胤の<sup>いぶきのや</sup>気吹舎での古道学修行、福澤諭吉の慶応義塾での英学修行、また維新後、福澤諭吉の慶応義塾、<sup>にしあまね</sup>西周の育英舎での政事学修行など、さまざまな修行が行われております(26頁の表1-2参照)。

ところで他国修行で修得を奨励された「普通之学」とは何でしょうか。これは明治2年(1869)の

明新館の学事改良、学校規則の改革で定められた「普通ノ学」のことです。「普通ノ学」は福井藩の教育改革の特色の1つとして非常に重要な言葉であると私は考えております。全国的に見ても明治3年（1870）以降、基礎教育の読書算を「普通学」と称した府藩県が出現しましたが、福井藩では中学校の教育内容を「普通ノ学」として規定しました。ある意味非常にオリジナルな言葉ではないかと考えております。この学事改良の時の「中学校規則 第二十八条」にはこんな風に書かれております。

「十七歳ニシテ試業（試験）ヲ経テ中学ニ入ル、是ヲ中学生トス。二十歳迄ニ三級の課業ヲ終フヘシ、是ヲ普通ノ学ト称スル事」とあります。具体的にはどういうことかといいますと、**史料6**をご覧ください。**史料6**に福井藩学校規程に記された学課表をあげました。<sup>がいじゅく</sup>外塾生というのは年令7、8歳から12歳、小学生が13歳から16歳、中学生が17歳から20歳ということになります。中学生の「普通ノ学」の内容を学課表と照合すると、「文学・数学・武学・歩兵・砲兵・剣・柔」の7科の総称であることがわかります。文学は国・漢・洋の3学合併で、なかでも地球説略とか博物新編とか気海観瀾は、理学概論を教授したものとして注目できます。また数学は比例・開平・開立・規矩術、武学には軍用科学・軍用測量・理学初歩といった理数系の他に、会話・単語篇・文典と言った語学も含まれます。学課表には歩兵・砲兵の訓練も組み込まれておりますので、「普通ノ学」とは軍事教育を支える人文科学と自然科学の科目ということとなります。ご参考までに、**史料6**（左表）に沼津兵学校の学課表を載せてあります。福井藩の学則は、内容的に沼津兵学校の影響を受けていますが、沼津では「普通学」とか「普通ノ学」と言った言葉は、学則には使用しておりません。福井では、「普通ノ学」が修得できないと、員外生、今でいう科目等履修生として参加する。当時は員外生・科目等履修生は歩兵訓練だけだったようで、一科専修、1つの科目を専修するというような処置がとられたようです。

普通学は当時の文武エリートの教養であったといえます。福井藩では、士族に必要な教育内容を「普通ノ学」としたのですが、今ご覧いただいたように「普通」とはいえ、内容はかなりハイレベルではないでしょうか。ですので、ドロップアウトする、「普通ノ学できません」という者も何人か現れるわけです。スライドをご覧ください。最初の文章「私儀、踏級相願居候処、生質凡庸ニて普通之学修業難仕候ニ付、員外生ニ罷成一両科之内専ラ勉励仕度候ニ付、員外生ニ被成下候様奉願上候」。性質凡庸とはなんとも厳しい評価ですけれども、これはおそらく文学の科目の成績不良によるものと思われます。この生徒は、士族の中でも上級の者でしたけれども、規則厳守が徹底されました。要するにはじめから、中学生でも普通の学をチャレンジしないというのは駄目だということですね。結局、これまでどおり、小学校修行を命じられました。次に、「小学規則生ニ御座候処、年頃にも相成候ニ付、中学校員外生ニ相成修行仕度此段願奉候」。この生徒の家は代々武術師範を務めたお家柄でして、このたび中学の入学年令、つまり17歳に達したので中学生員外生として修行させてほしいと願ひ出ております。これは代々武術師範ということも配慮して許されております。3つ目に、「私倅雄輔儀、小学校規則附居候処、病後体力虚弱ニて右規則ニ付居候事難相成御座候間、員外生ニ被成下候様願奉存候」。小学校では体操修行が強化されており、体操を修了した者から中学校の科目である歩兵・砲兵など兵隊訓練に必要なフランス式の体操へ進むように指示されておりました。したがって小学校でも、基礎的な体力を身に付ける運動として、先ほどの学課表にもありましたような体操というのを重視していたと思われます。この体操について、病み上がりなのであまり激しい運動は免除してほしい、と

いうことで、最後に「右は病後体力虚弱、当分劇運動は不宜候段、診察之上及指図候也」と、医師の診断書も添えられています。

福井藩の他国修行は、このように厳しく「普通ノ学」修行を義務付けたというところに大きな特徴があります。「普通ノ学」に関して、先ほど沼津兵学校の学課表と見比べて、非常に関連性があるということをお話しましたが、この沼津兵学校へは、明治2年（1869）10月に16名もの福井藩修行生が送り込まれているということが分かっています。沼津兵学校は幕府の江戸城明け渡しの後、静岡藩へ移住した旧幕臣のうち、陸軍を中心として沼津へ移住した藩士子弟のために明治元年（1868）12月に創設された学校です。創設当初は徳川家兵学校という名称でしたが、のちに沼津学校と改称されました。沼津兵学校が通称になっているようです。学校への他藩員外生（他の藩からの留学生）では、福井藩が最初となります。沼津兵学校の校長であった西周<sup>にしあまね</sup>は、福井藩からの受け入れは、西周自身の提案であると語っています。日本史研究の大久保利謙氏は、福井藩士子弟の沼津へ派遣の動機を、春嶽<sup>としあき</sup>さんの意思によるものであると推測しております。先ほどの史料6にありましたように、近代的な軍事教育に必要な理数系の教育、それから体操、それが全国的な評判を得ておりました。やはり当時理数系の科目、それから体操というのを教育内容に入れていた学校というのはまだごく僅かで、沼津兵学校がその最初だと言われています。

#### 4. 沼津兵学校への遊学

史料7をご覧ください。この「修行生規則」は、沼津兵学校の福井藩員外生関係の史料の中にあつたものです。5項目めにむやみに国事を批判することを禁じているのは、当時兵学校の生徒に政府を批判する者が多く、その影響を懸念しての配慮からだと考えます。旧幕臣は明治政府に対し痛烈な批判をするわけですね。そういう事を一緒にしてはいけないということです。修行期間は約2年となっております。史料8をご覧ください。この「塾中規則」は、寄宿舍での規則です。就学態度や生活態度が厳しく管理されており、これは彼らが背負った使命の大きさを感じさせます。自分の身の回りのことは自分です、というきまりも非常に面白いと思います。史料9をご覧ください。これは手当金についてです。費用は基本的に全て藩からの支給です。史料では、1人1日壺分式朱支給されています。これは、換算すると1人1ヶ月約10両式分、年間では123両となります。123両と言いますと、沼津兵学校の二等教授方の年俸120両よりも多く、修行先の静岡藩の人たちから見れば福井藩の修行生は恵まれた学校生活を送っていたことが分かります。この修行生のまとめ役だった寮長の永見裕は、従来の手当金の他に藩から年に50両を支給されています。また、新番格以下の出身で、1人支給額が低かった坂野秀三郎についても、藩が特別手当によって積極的に支援していたことが判明します。

史料10をご覧ください。これは、ちゃんと規則を守って修行いたします、という誓約書です。修行目的はこの中で「兵学」と明記されています。この誓約書を書いた6名のうち、5名はちゃんと資業生に及第しております。史料11をご覧ください。先ほど名前が出た坂野は非常に優秀な生徒で、一旦福井に帰った後また試験を受けて、再度沼津への遊学を許されています。坂野は帰藩後は、明新館洋学教授となり、廃藩置県後は名古屋に出て弁護士になりました。沼津での福井藩修行生16名については、表2にありますのでご覧ください。遊学後の主な経歴を見ますと廃藩置県後も沼津修行者は活

躍していることが分かります。

ただし、沼津兵学校で修行してきた人たちのうち、廃藩置県後ほとんどが他府県へ出てしまっています。その中で唯一生涯をふるさとの福井で過ごした人がおります。それが若代<sup>わかしろ</sup>漣<sup>れんぞう</sup>蔵です。表2に記したように、廃藩置県後、福井中学の英語教員として永年教鞭を執っていました。実は御子孫の方も戦後福井中学（藤島高校）で教鞭を執っており、藤島高校のすぐ近くにご自宅があり、私も何回かお尋ねしたことがあります。若代は、本多家家来佐久間直英の七男で、明治元（1868）年には福井藩士瓜生寅に師事して英学を学んでいます。またこの頃、若代老之助の養子になり名前が変わりました。福井中学を退職後は銀行の頭取などを務め、士族授産にも一役買いました。本日皆様にご紹介したいのは、若代の数学ノートです。これは、若代漣蔵が沼津遊学中に写した数学のノートで、現在福井市立図書館に所蔵されております。これによって当時の日本において最先端の数学教育が行われていたことが分かるわけです。実際に沼津でどの程度の数学が教授されていたのか。沼津兵学校では、全国的にも著名な数学者塚本明毅が著した教科書『筆算訓蒙』を使い教えていたわけですが、本当に使用したのか、どのように教えていたのか、詳しいことはわかっておりませんでした。若代のノートは我々の疑問を解決してくれる貴重な史料です。これまで全く紹介されたことはありませんでした。A5版の31丁の和装本で、表紙に「筆算」と大きな字で題目が書かれています。その横に「級数」「方級数」「対数」とやや小さめの字で書かれ、最後の奥付には、「明治第三庚午之秋八月 於沼津客舎写之 若代蔵」と記されています。表紙を開くと、級数、方級数、対数の順で、それぞれに解説、問題、解答が並んでおり、自学自習できるようになっています。内容的には小学校高学年、あるいは中学校レベルの数学問題で、皆さんも文言は違えど、旅人算など解いた覚えがおありではないかと思えます。

それでは、若代の数学ノートに記載されている数学の問題をご紹介します。級数の最初の方は、私も解きましたので、皆さんも解いてみて下さい。5問ほど、スライドでご紹介します。1問めは、初項6で  $6 + (3 \times 1)$  並べて10項目めでいくつというもの。2問めは、俵を杉型に積んで一番下に14俵並べると、総数は何俵か。これは、絵を描いてしまうと簡単ですが、ちゃんと計算式で出します。3問めは、時太鼓を毎時その数にしたがって叩く時は、一昼夜の数はいくつか。これも数えるとできますが、計算式を作って解きます。第4問めは、旅人が初日4里、その後若干里を増し第9日に36里を歩く時、総里数はいくらか。これは最初4を初項として、計算するものです。このような旅人算の問題の他に、実生活と結びついたお金の計算が数多く出てきております。借金の計算は、切実な問題だったかもしれません。第5問めは、金1,924両を26ヶ月で返却する場合、初年121両、毎年同額を返す時の最後の年の返却額はいくらか。これは少し時間がかかりましたが、答えは27両です。

### 数学の問題

- 初項6、差3、第10項数はいくつ？
- 俵を杉型に積みます。下に14俵並べると総数は何俵？
- 時鼓を毎時その数に従ってたたく時は、一昼夜の数はいくつ？
- 旅人は初日4里から、若干里を増し、第9日に至って36里を歩くといひます。総里数はいくら？
- 金1924両を26ヶ月で返却します。初年は121両。毎年同額返す時、最後の年の返却額はいくらか？

答:33、105俵、156、180里、27両

若代の数学ノートの問題を実際に解いてみますと、答えが合わないものはいくつかありました。これは、おそらく写し間違いではないかと思えます。写し間違いではないかと思われる箇所を、大変興味深いものをご紹介します。それは、数学ノートに記載された中では、一番難しい項目である「対数」

にありました。数学ノートにある対数というのは兵学校の資業生、最上級生の3級上級クラスの科目です。だから一番難しい。そして当時としては、対数は最先端の計算方法ではなかったかと思えます。若代は沼津に遊学していますがまだ2年たらずの時なので、若代自身がそこまで数学が上達していたかどうかは甚だ疑問です。おそらく沼津での教育内容や教授方法の情報を福井へ報告することも修行者の重要な使命であったということを考えれば、内容の理解は二次にしてとにかく何でも筆写して持ち帰った、あるいは書き送ったということだと思います。

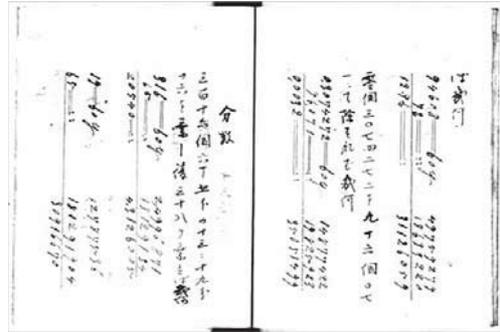
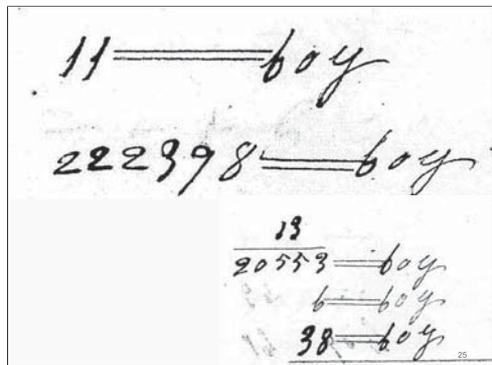


写真1 若代の数学ノート(福井市立図書館蔵)

沼津の数学教科書『筆算訓蒙』は、現在市立図書館に第1巻しか所蔵されておられませんので、後は修行生自身が筆写して書き送ったのではないのかと思います。「対数」は数学ノートの中でも一番分かりにくい部分で、解説も分かりにくい感があります。まず対数表の作られ方が述べてあり、仮数・真数と解説があります。私も対数計算には苦戦した覚えがあります。対数計算、縦・横になっておりますが、logの後ろに真数を書いて仮数と等号で結合することになっております。対数はロガリズム Logarithm といって「log」という記号で表します。ただ、若代のノートでは、横文字で書かれた log がどうしても boy に見えてしまうのですが、皆さんはいかがでしょう。拡大してみましょう。何となくすべて boy になっているのではないかと。私はこの点について、大学院時代に学会で発表し、「boy に見えませんか」と問いかけたのですが、「いや、見えない」と一蹴されてしまいました。それ以来、あまり人前では言うておりません。拙著では述べましたが。要するにこれから何がわかるかということ、当時の学習方法は、授業内容は分からなくても黒板をひたすら写すという方法であったろうということです。そしてまた、板書を写したノートを借りてまた写すと、どこかで写し間違いがあるわけで、若代も思わず自分の知っている boy と、log と勘違いして書いてしまったのではないかと、そんな想像をしております。



若代は、先ほど述べましたように、福井へ帰藩後は英語の先生になりましたが、数学教育においても明治9年(1876)に福井で発行された数学教材『筆算速知』(下)の編集に参加するなどの業績を残しております。この『筆算速知』の中には、立派な対数表が入っておりますので、沼津での修行成果が生かされたといえます。この『筆算速知』も、福井市立図書館に所蔵されております。

それでは、次の図1をご覧ください。福井藩は他国修行を奨励しましたが、とはいえ、藩士子弟の希望者全員が他国へ行って修行できるというような財政状況ではありませんでした。そこで、自前で養成した教授陣に加え、他から洋学あるいは数学・兵学に長けた文武教官を雇い入れることを実行します。しかし、これら洋学の人材は全国的にも不足していて、福井藩も例外ではありませんでした。特に兵学については、明治3年11月に明治政府が陸軍に関してフランス式を採用したことにより、旧

幕府のフランスの陸軍伝習の知識が必要となりました。そこで福井藩が考えたのが、戊辰戦争の際に榎本武揚とともに捕らえられた箱館降伏人を活用することです。彼らは旧幕府の海陸軍所の出身者がほとんどでした。箱館降伏人は総計561名で、そのうち143名が静岡藩へ引き渡され、残りの418名が他藩へ預けられました。榎本クラスの大物は中央で収監されましたが、ほとんどは諸藩預かりとなり、例えば、箱館病院を開設した医師高松凌雲は徳島藩へ預けられました。福井藩では「御預人」としてそこに名前を挙げました20名を引き受け、兵学や数学の教授として、厚遇しています。ちゃんと給料も貰っています。「御預人」の読み方は、「おあずかりびと」「おあずけびと」と、立場によって読み方も変わりますが、福井藩では「おあずかりびと」と呼んでいたのではないのでしょうか。

福井藩では明治4年（1871）には、洋学教師として横浜語学所の教官で英語の通詞も勤めた太田源三郎を静岡藩から借り受けております。このような人を静岡藩では、静岡藩から人を貸すという意味で、「御貸人」と呼びました。当時の読み方は不明ですが、「おかしびと」「おかしにん」と私は読んでいます。全国的に静岡藩と慶応義塾の教師が教育ならびに藩校改革の一翼を担っていたということが分かります（図1参照）。さらに詳しく調べると人数が増えるのではないかと思います。当時としては最先端の教育を行っていた静岡藩の学問所と沼津兵学校、慶応義塾から全国に多くの人が派遣され、藩校の教師として雇われています。しかし、「御預人」については、すべての「御預人」が福井藩のように厚遇されたかどうかは疑問です。ただ、福井藩のように藩校改革を担わせ、有効活用した藩が多かったという事実は、教育史上注目に値します。この当時は明治政府もまだ政府（国）としての学校規則を用意していない時期で、沼津や慶応をモデルとした教育の全国的な展開を黙認せざるをえなかったのではないかと思います。

福井では明治4年3月にグリフィスを招聘して、さらに理化学の勉強が盛んになりました。グリフィスに関しては、資料12をご覧ください。グリフィスが『ネイチャー』に投稿した日本からの報告を和訳して、ご紹介します。グリフィスのいう「この国の教育に最も不足している部分」とは何かということですが、やはり近代科学、実験とか実証、実用そういう近代科学に基づいた物の見方、それが当時はまだ不足していたのではないのでしょうか。合理的な物の見方ですね。グリフィスに関しては、山下英一先生の研究に詳しいと思います。世界的な科学雑誌『ネイチャー』にこのように掲載されたということが、私にとっては大変興味深いことです。

## 5. 他国修行の実態

続いてはスライドをご覧ください。福井藩では明治4年2月に学制改革を行います。これにより、学校は「四民一途人材教育」の場として位置づけられました。四民平等の教育を謳った制度では、外塾への庶民の入学を許し、外塾の教育内容も日常に必要な読み・書き・そろばんに改められました。これは、いわゆる初等教育レベルの「普通学」ということになります。また、中学校では学科目から、武学を削除しました。これはどういうことかといいますと、2つの大きな理由があるのではないかと思います。まず1つめは、やはり外塾に町人らを入れ、そこから将来小学校・中学校へ進学するかもしれないとなると、武士の職分である武学は外すべきであるという考え方です。2つめは、やはりこの時期になりますと、国家のほうで徴兵に関してはきちんと制度化していくということでもあります。

ので、兵を藩校で養成する必要がなくなるという合理的な考え方です。福井藩では、先を見越して文武学校から文学校に自ら変換したということです。文武のエリートの教養として設定した「普通ノ学」も必然的に消滅していきます。しかしいずれにせよ、この改革には武士の意識改革が必要であったと思われます。第17代藩主松平茂昭さんは、明治4年4月に文武の解職を宣言します。武士の意識改革を促して四民平等を実現しようとしたのです。

福井藩の教育改革は他国修行を実働部隊として、わずか10年余りの間に近代学校教育の生成にまでたどり着いたと言えます。教育改革の実働部隊と今言いましたが、他国修行の実態はどのようなもので、実際は何人他国修行に行っているのか、藩士・子弟の履歴から分析しております（拙著第4章参照）。士族の履歴史料が松平文庫に収められておりまして、管見の限りでは、756家789名の家督前後から廃藩置県後までの経歴が収められています。その中から、他国修行の記載がある者を抽出し、その最初に出てくる修行名目によって分類しました。私の分析では、福井藩の他国修行は総計113名、士族の約15%余りが経験したことになります。修行目的の変遷という視点から、データを分析すると、嘉永年間の砲術修行から始まって、航海術それから測量術、そして洋学・西洋兵学、明治維新以降この辺が増えていきます。医学はおそらく私費を含めると、家業である者も含め、時代を越えて万遍なく修行者がいたと考えます。他国修行は、どのような身分と年齢の者が中心であったのかということ、だいたい大番組100石から150石前後の中級士が多いということが分かります。

藩士の子弟の履歴「子弟輩」から他国修行を抽出すると、子弟244名のうち、44名が修行経験があります。全体の約20%に当たり、他藩と比べてもかなり高い遊学者率、他国修行率です。人気の修行は、慶応年間以降、非常に増えた兵学です。これは沼津兵学校への遊学も一部含まれております。

子弟の他国修行については、春嶽<sup>ゆきえ</sup>さんの側用人中根<sup>ちね</sup>鞆<sup>もろ</sup>負<sup>ひ</sup>（雪江）や酒井、毛受、松平など藩重臣の子弟を除き、ほとんどが中級士以下の出身であるというのが特徴です。「新番格以下増補雑輩」という履歴が1冊ありまして、それを分析すると 医術とか商法とか算術・工学などを学びにいろいろな所へ行っております。福井藩の他国修行は、私塾も入れると人数がさらに増えると思いますが、財源がはたしてそんなにたくさんあったのか、どこから捻出したのか、皆さんお思いになると思います。この財源に関しては私もいろいろ調べましたが、明治維新以後になりますと金館<sup>きんかん</sup>方<sup>がた</sup>という部署でお金を借りたなどという文書が出てきます。借金をしてでも子どもを遊学させたいと金策に走る親心は昔も今も同じです。藩の財政については、由利公正が貿易で儲けたという話もあるようですが、実際のところは、私の方ではまだ確認できておりません。福井藩の長崎・横浜での貿易については、本川幹

**福井藩教育改革との連携**  
 明治4年(1871)2月 学制改革  
 「四民一途人材教育ノ制度ニ革ム」  
 ↓  
 ・外塾＝日常必要な読書算  
 ・小学校＝実用的な科目、理学の概説  
 ・中学校＝「武学」を削除、「歩兵・砲兵」を正規の学科表から分離。→「普通ノ学」の規定が消滅  
 明治4年(1871)4月 文武ノ解職

**他国修行の変遷**  
 ・砲術修行—航海術修行—測量術修行  
 ・医術修行  
 ・学問修行・武術修行  
 ・洋学修行・英学修行  
 ・兵学修行・喇叭修行・馬術修行

男先生が近年論文を書いていらっしゃいます。教育への投資は、福井藩は薩摩や佐賀藩に負けないくらい力を注いでいたと感じます。

他国修行の目的は、砲術修行から航海術修行、そして測量術修行、医術修行、それから学問修行など多岐にわたっています。学問修行というのは熊本藩の儒者横井小楠への儒学修行で、特に藩政改革のための政事学の勉学を目的としたようです。また修行だけではなくて、他藩との情報交換、情報収集なども目的のひとつでした。それから、洋学修行・英学修行が分けて扱われている理由は、洋学は英語を含めて外国語あるいは翻訳書による西洋の諸学問を指し、英学は英語学的な要素が強い修行内容を指すのではないかと思います。兵学修行は、兵学講義の他に、軍事教練が含まれます。喇叭修行では、福井藩から鯖江藩に修行に行った者がおります。喇叭は、西洋式軍隊の行進などに必要だったと考えております。何で鯖江なのかというのは、今後の課題です。喇叭修行の3名のうち2名がもともと太鼓役であることがわかります。要するに軍事教練のときに太鼓を使っていた、それが喇叭に取って替わられるわけです。福井は嘉永、弘化年間から砲術修行をやってしまして、砲兵訓練も非常に熱心に取り組んでいましたが、その訓練のとき大砲の音と太鼓の音というのはかぶってしまうのではないかと思います。号令の音が聞こえないと不都合なので、喇叭になったのではないかと。太鼓は文久年間くらいまで使われていますが、慶応年間になると喇叭修行に出かけています。

また、もう1つ考えられる理由としては、福井藩の兵制改革との関連性です。慶応2年(1866)に牧野繁門という人が英式の喇叭修行のために長崎に赴いていますが、明治3年、仏学修行のため横浜へ出向いています。これは福井藩が仏式陸軍伝習を採用したことが理由です。この喇叭修行については、藩校改革の実態を探る上でも非常に面白く、また今後他藩と比較する材料としても、新たにどのような政治的な背景、あるいは軍事的な背景があったのか、修行の方法の変遷なども分かりましたらお話しさせていただきたいと思います。

他国修行も慶応3年(1867)になりますと、依命により海外へ留学する者が現れます。例えば、武器の買付けを目的としてアメリカに行ったといわれております佐々木権六や、20歳のときに藩命で長崎の幕府直轄の語学所へ修行に行き慶応2年幕府が学問や商業を目的とした海外渡航を解禁した翌年の慶応3年米国へ留学した八木<sup>やそはち</sup>八十八がいます。八十八は、留学前に橋本左内の師として知られる吉田<sup>とうこう</sup>東篁の勧めで、日下部太郎と改名したといわれております。日下部は非常に優秀な男性で、グラマースクールからアメリカの東海岸にあるラトガーズに留学し、最初はラトガーズ大学の予科であるグラマースクールに入り、その後、ラトガーズ大学へ入学しました。しかし、卒業直前の明治3年、肺結核によって26歳の若さで亡くなっております。この他数名、慶応3年以降に海外留学しておりますが、英国修行中に亡くなった者が1名いることから、やはり当時海外に留学するということは、経済的な面はもちろん、精神的にも相当な負担があったであろうと思います。

資料13をご覧ください。すでに役職に就いて他国修行に行く機会がなかった、あるいは家業がいわゆる伝統的な武芸や儒学の人たちはどうしたのかということです。団野<sup>かくじ</sup>確爾の例をご紹介します。これは拙著からの引用です。団野は明治3年(1870)に24歳、代々柔術師範をつとめてきた家柄でしたが、明治2年12月に土着を願い出ました。翌3年福井の南の荒地に土着し、農業を営んでいましたが、同年由利公正の警衛として上京した際に、築地牛馬会社の主任に牛乳搾取法や精製法を習い、さらに横

浜在住の英国人にも伝習を受け、洋牛を購入して帰郷し福井市内で牛乳販売業を開きます。しかし、当時牛乳販売はまだ普及しておらず、経済的な困難に陥り事業は失敗に終わりましたが、明治9年に敦賀県勸業課長の協力を得て、福井毛矢町に植物試験場と牧畜場を設けました。その後牧畜業に励み、明治14年（1881）には牛乳販売を勉強して、福井市内で再び事業を起こしました。他国修行に長期間行かなくても、このように何かをきっかけとして、福井で事業を起こしたい、会社を作りたいということで短期間の修行に横浜へ行く、あるいは大坂へ行く、あるいは東京へ行く人が相当数いたようです。由利の助言もあったかもしれませんが、団野という人は、当時まだ牛肉もあまり食べない時代に牛乳販売に目を付けた面白い人です。牛乳も今と違い、もっと乳臭かったのではないかと想像できますが、それを販売するという非常に画期的な事業に取り組んだのは、やはり短期とはいえ他国修行の成果ではないでしょうか。年齢にかかわらず、他所へ行って何か学んで来ようという貪欲さが重要なのではないかと思います。

前半の最後になりますが、他国修行の第1世代・第2世代ということで、親子で修行したことがある藩士子弟についてご紹介します。すでに名前が出ました中根雪江と鳥介、佐々木長淳と忠次郎、白井久人と光太郎の3組の親子です。他国修行の始まった頃の第1世代、これはだいたい春嶽さんと同じ年代あるいはもうちょっと下の年代だと思います。そして、他国修行が組織化されて維新後には「普通ノ学」の習得を義務付けられた第2世代、そして最後に、明治維新前後に生まれて近代学校教育制度の中で教育を受けた第3世代。その中で第1世代・第2世代と繋がる親子3組の他国修行について、ご紹介したいと思います。

まず、中根雪江と次男の鳥介について、**史料14**をご覧ください。名前の読みはいつも気を使いますが、「とりすけ」ではなく「ちょうすけ」ではないかと思います。中根は平田篤胤の生前門人で、実学を伴わない急速な改革と当時の洋風化（西洋化）について警鐘を鳴らしています。この沼津兵学校の福井藩寮長永見裕宛の雪江書簡から、沼津兵学校では測量術なども実地にやっており、実地測量に基づき図面を書いたりするので、数学も科学も図絵を書くセンスも持ち合わせていなければならないということがわかります。「此表ニテ中等ニハ超ヘ不申トノ批評ノ由」とは要するに、福井では非常に優秀であるといっても、沼津では中位以下のレベルであると。「唯吾顔ニ付タル墨ハ見ヘ不申、笑止千万ノ事ニ御座候」と、福井での教育を批判しています。「聞キアヤカリノ改革」について警鐘を鳴らしています。「悪シキ事マテ西洋風ヲナライ」急激に改革する、江戸時代が良くなかったといつて、明治政府が新しいことは兎に角何でも良いんだと、新しい政策をバンバン出してくる、それが笑止千万。何でも西洋風といつて日本魂を失っているような体たらくぶりを西洋人も笑いものにしているに違いないと嘆き、鳥介にはそのような事なく、<sup>へい</sup>秉彝、つまり天から与えられた正しい道と、心術、心の持ち方を学んでほしいというのである。この書簡で、雪江は当時の浮足立った状況を冷静に分析・批判しています。雪江は福井藩の改革において、重要なアドバイザーかつ監視役ではないかと私は思っています。鳥介は、沼津兵学校から帰藩後、北海道に渡って開拓使に参加したと伝えられております。

次に**資料15**をご覧ください。親子2代で海外留学を果たした佐々木長淳と佐々木忠次郎です。佐々木長淳というのは先ほどご紹介した佐々木権六のことです。この2人は親子共に養蚕の振興に力を尽く

しております。長渟に関しては、こども歴史文化館の職員でいらっしゃる長野栄俊さんが論文で書いておられます。長渟の経歴は、長野論文から引用しました。長渟の子息である佐々木忠次郎は、皆さんも歴史の教科書で学ばれたと思いますが、モースに従って大森貝塚を発掘したことで有名です。大森貝塚にいま石碑が立っていますが、そこに佐々木忠次郎と名前が入っています。<sup>きょうそ</sup>蠶蛆の生活史、微粒子の研究などで有名です。明治22年（1889）から24年（1891）に養蚕及び水産術研究のため欧米留学とありますが、おもにドイツのミュンヘンに留学しました。資料15の後半をご覧ください。西尾敏彦さんがこの養蚕技術ということで注目しまして、この親子について書いております。西尾さんは東大を出られて、農水省水産技術会議の事務局長などを務めた方です。西尾さんは、忠次郎の研究が観察に裏付けられている点を高く評価しています。例えば昆虫研究で、他の研究者が昆虫採集のように標本作成に熱を上げたのに対し、忠次郎は昆虫を幼虫から育て、その生育をきちんと観察し、いろいろな病気に対しての解決策を見出していくという手法で取り組みました。

佐々木忠次郎が蚕の微粒子病という病気について研究し養蚕の発展に貢献したとすると、次の白井光太郎は稲の病気について研究し、稲作の発展に尽くした人です。資料16をご覧ください。白井光太郎は稲のいもち病などを研究し、植物病理学の第一人者として有名です。この白井光太郎に関しては、当文書館主任の柳沢芙美子さんが書かれておりますのでその論文から引用しております。白井光太郎のお父さんは近従頭取の白井久人で、春嶽さんに近かった人です。資料16後半に山田昌雄さんの論文も引用しておりますので、ご覧ください。白井光太郎は先ほど述べましたように、日本の農業を支える貴重な研究をした人です。

佐々木忠次郎と白井光太郎は、同時代に活躍した福井の第2世代です。明治23年（1890）6月に東京帝国大学に農科大学が設置されまして、2人とも助教授に就任しています。東京帝国大学では講座制が明治26年（1893）9月から敷かれる訳ですが、佐々木忠次郎は動物学・昆虫学・養蚕学の第二講座の初代教授となりました。一方、白井光太郎は最初、森林植物学の助教授でしたが、明治39年（1906）4月に植物病理学の講座が作られたときに、初代教授に着任しています。これは白井光太郎がドイツに留学して、帰国後すぐに教授に就任したということになります。森林学から植物病理へ学問研究を変えたという経緯もあって、現在国立国会図書館に収められている光太郎の蔵書には本草学に関する蔵書が多いわけです。佐々木忠次郎と白井光太郎という、近代日本の重要な産業である養蚕と重要な作物である稲の研究をした2人の人物を福井から輩出していることは、今回私も、この講演の原稿を準備をする中で初めて知りました。特に白井光太郎については、近年本草学の蔵書コレクションが脚光を浴びていますが、重要ないもち病の研究については、私も農大にいながら、詳しくは知らなかったものですから、福井にゆかりがある人と知り、とても嬉しく思っています。佐々木忠次郎と白井光太郎のサイエンスの基礎と観察を重視した研究は、世代を超えて受け継がれた他国修行の成果といえるのではないのでしょうか。

## II 藩主の学問修行

### 1. 松平慶永（春嶽）の学問修行

松平春嶽さんの学問修行は、藩主教育として、側用人中根雪江により計画的に行われます。儒学に留まらず、雪江の影響で平田篤胤の古道学まで学んでいます。また、幕末から明治にかけては、西周に政事学を師事し、自ら書いた政まつりごとに関する文章を周に赤字添削してもらった文書が残っています。

### 2. 慶永孫、松平康莊やすたかの農学修行

本日後半は、松平春嶽さんの孫で、第17代藩主松平茂昭もちあきの二男の康莊やすたかさんの英国への農学修行について、写真もふんだんにご紹介しながら、お話させていただきます。康莊さんというと、一般的に知られている写真は細身で、端正な顔立ちにりっぱな口髭をたくわえている写真です。私の知る限り、康莊さんのあの風貌は、イギリスから帰ってこられて間もない頃の26、7歳の写真からですので、イギリスでよほど食事が悪かったのか、ご苦労なさったんだと思います。本日は、康莊さんが17歳でドイツ・ベルリンに留学される直前におそらく撮った写真をご紹介します。これは、福井市立郷土歴史博物館に残されておりました（写真2）。なかなかハンサムで、非常に若々しく、元気な好青年です。



写真2 松平康莊の肖像写真

康莊さんは、幼名信次郎といいまして、慶応3年2月6日、西暦では1867年3月11日に福井城二の丸で生まれました。康莊さんが日本で受けた教育は、スライドにまとめましたので、ご覧ください。もうこの頃、近代学校教育制度が発足していますので、江戸（東京）に移られ、廃藩置県後、日本橋に居住し、官立小学校に通いながら漢籍の私塾へ通うというダブルスクールで学んでいました。満10歳で、慶応義塾の幼年局に入りますが、福澤諭吉の門人達が全員官職からおりるといいうゆる明治14年の政変が起こる少し前に、幼年局を退塾しております。そして、学問所、これは康莊さんの為に作られた学問所で教育を受けながら勉強しまして、その後学習院に16歳で入学します。その学習院が明治天皇の意向で軍事教育を重視する方針となりましたので、康莊さんも健康診断を受けて、それほど体は強くはなかったですけれど、一応合格して陸軍修行の予備学校に行くことが決まります。しかし、その直後、ドイツへの陸軍修行願が提出されました。ドイツ留学については、史料17をご覧ください。これは松平康莊さんのドイツ留学に関する記事が、明治17年2月13日付福井新聞に掲載されたものです。康莊さんは旅立つ前に明治天皇に拝謁し、明治天皇から直接天盃を受け取ったと記されています。それだけ、康莊さんのドイツ陸軍修行は、華族子弟の在り様としても、非常に期待されていたということになります。康莊さんの答辞を史料にご紹介しましたが、送辞は、後に帝大総長にもなった渡辺洪基が読んでいます。在東京の旧福井藩士だけで、およそ100名ほどが料亭に集まり、送別の宴を開いたそうです。

**松平康莊の教育**

慶応3年2月6日生まれ(1867年3月11日)

→ 学問所	→ 学習院
6～9歳	10～13歳
14～16歳	16歳

→ 海外留学(ドイツ陸軍修行→英国農学修行)

17～25歳

康荘さんは6年間の予定でヨーロッパに渡ったわけですが、ドイツに渡って3年目の終わり、明治19年の12月、ドイツからイギリスへ移転しています。史料18をご覧ください。すでにこの明治19年12月の時点で、松平家では英国サイレンセスター王立農学校への入学を了解していることが分かります。ただし史料19を見ますと、旧家臣達は、康荘さんはケンブリッジ大学へ行くものと確信している、勘違いしていると言っていると思いますけれども、かの有名なケンブリッジ大学へ普通学を学びに行くとして理解しています。史料19は康荘の学事監督として東京から派遣される東京高等中学教員で、武生出身松本晩翠の子息松本源太郎が日本から派遣されるという時の記事です。松本源太郎自身も、ケンブリッジ大学で倫理・哲学の勉強をしたいと意気込んで、英国へ渡ったわけですが、しかし、英国へ来てみたら話と随分違うところだったというので、その感想を松平家家令武田正規へ書き送っています。史料19はその源太郎が日本から派遣される時、『福井新報』に掲載された記事です。

康荘さんが陸軍修行から一転、農学を勉強すると言った時、周囲の反応はどうだったのでしょうか。当時農学校といってもイメージとしては農業しか思いつきませんでした。日本では、科学的な農学教育といっても、一般的には知られておりませんでしたから、旧家臣にとっては言語道断であったようです。旧家臣の中には、せめて英国貴族のようにケンブリッジ大学かオックスフォード大学に入学して貴族の教養としての学問を修めてきてもらいたいという意見もありました。

康荘さんがなぜ農学修行を選んだかは分かりません。春嶽さんの助言があったのかもしれませんが。また、春嶽さんとも家族ぐるみのつきあいで、康荘さんも世話になった福澤諭吉の助言があったのかもしれませんが。資料20をご覧ください。実は、明治16年（1883）に2人の息子を福澤諭吉はアメリカに留学させております。数学が苦手な長男・一太郎には農学が良いのではないかと書き送り、自らも東京三田の育種場に行って、いま農業で何をやれば良いのかと場長に問い、果樹研究が良いですよと聞き、将来の日本にとって果樹栽培、培養が有益であると一太郎へ書き送っております。一太郎は結局、化学の成績が芳しくなく、農学をドロップアウトし、商業に進みました。諭吉は農学修行ではサイエンスも学ぶことを知って、こんな風に言っています。「農学にサイエンスが必要とは素晴らしい」。当時、様々な学問に詳しくあった諭吉でさえも、農学とサイエンスが直接結びついていなかったのではないのでしょうか。

「農は立国の基本」「農を卑しむのはよくない」とは、春嶽さんの言葉です。また、明治11年（1878）に行われた駒場農学校の開校式で演説した明治天皇も「農は立国の基本である」と説いています。農業関係雑誌でも「農は立国の基本である」と、農業の重要性、農学研究の重要性を掲げ、明治23、24年頃には、社会にもその意識は浸透してきたのではないかと思います。農学及び農業教育に関しては、明治初年の岩倉使節団の欧米視察により、報告書が提出されています。その際に、康荘さんが留学した英国サイレンセスター王立農学校についても、言及しています。王立農学校は1845年にビクトリア女王からロイヤルの勅許を受け創設された農学校です。今現在のチェア（Chair）会頭は、チャールズ皇太子になります。

このサイレンセスター王立農学校と、春嶽さん、あるいは康荘さんを繋

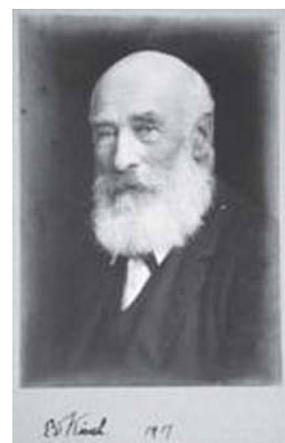


写真3 キンチの肖像写真

ぐ人物として、駒場農学校の英人御雇教師キンチがいます（写真3）。エドワード・キンチは、明治9年（1876）に来日して駒場農学校で5年間化学を教えたのですが、帰国後、王立農学校に教授として採用されました。王立農学校は、イングランド地方のちょうど真ん中辺になります。コッツウォルズ地方（Cotswolds）にあり、皆さんご存知のハリーポッターの撮影場所にもなっているような田園地域です。定年退職後に余生を過ごしたいといわれるような非常にのんびりしたところです。サイレンセスター王立農学校化学教授キンチを訪ねて多くの日本人、特に駒場農学校卒業生が訪れています。キンチは非常に日本人に親切だ



写真4 王立農学校の集合写真(上：1889年、下：1891年)

ったと言われています。英国にあるキンチのお墓を突き止めてきましたが、その墓碑に「EDWARD KINCH OF KOMABA」と書いてあるのですね。キンチが日本から帰って、大正14年（1915）に王立農学校を定年退職し、その5年後には亡くなっているのですが、退職後に移り住んだ家に「KOMABA」と名づけております。これについてはまたいろいろなエピソードがありますが、今日は省略いたします。それほど日本に対して、非常に良い印象を持っていたキンチが、康荘さんと一緒に写った写真があります（写真4）。キンチは長い髭の先生です。1889（明治22）年夏学期の写真は、康荘さんが農学校に入学、最初の授業に参加した時のものです。康荘さんどこにいるかお分かりになりますか。アジア人は康荘さんの手前にインド人の顔も見えますが、インドは当時イギリスの植民地でしたので留学するような上流階級はおそらく英語が話せたでしょう。英語を母語としないアジア人はおそらく康荘さんだけだったと思います。その後1891（明治24）年に撮られた写真もあります。農業実習で日焼けし、髭を生やしてかなり痩せてしまっています。

私は2009年9月から2010年3月の半年間、勤務する東京農業大学から依命留学により、英国オックスフォード大学へ行く機会を得ましたので、オックスフォードにいる間にサイレンセスター王立農学校へも調査に行っていました。アーキビストのローナ・パーカーさんのご協力もいただき、康荘さんやキンチの写真をはじめ、多くの日本関係史料を発掘することができました。その中の1つに学籍簿があります。「Matsudaira Yasutaka」とあります。後から付け加えたと思いますが、「The Marquis」と書いてあります。マークウイスとは、公爵のことです。住所も記載されていました。帰国後の東京水道町の住所ですので、おそらく帰国後も海外通信員としてずっとコンタクトがあったものと思われると思います。

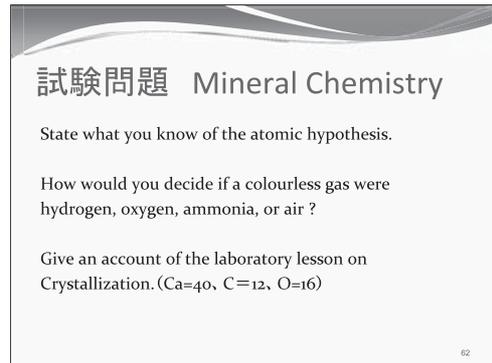
実はサイレンセスター王立農学校への留学は、教育史研究では、後に昭和天皇の侍講をつとめた杉浦重剛しげたけが最初だといわれているのですが、この学籍簿には杉浦の名前は記されてはおりませんが、授業

に出た形跡はありません。杉浦自身も自分は農学ではなく、純粹理学をやりたかったので、農学校からはすぐ転学してしまったと語っているようです。ですから、王立農学校へ入学し、正規の授業を履修したのは康荘さんが実質的には初めてであると言っていいと思います。また、学籍簿の他に、教員・学生の在籍者名簿や、各学期の出席者名簿もあります。今でもそうですけれども、出席名簿に自筆でサインしたものです。綺麗な筆記体で、「Yasutaka Matsudaira」とあります。また、試験問題も残っています。慣れない英語での勉強は、なかなか難しかったろうと思います。ミネラルケミストリー（無機化学）の実際の問題を理科教育の教授に見てもらいましたら、当時としてはおそらく最先端の基礎的な科学を学んでいたのではなかったかとのこと。しかも文章題に文章で答えるというものですので、英語が相当分らないと、良い成績は取れなかったでしょう。

康荘さんが春嶽さんへ出した書簡にも、「試験は生れて初めてにして」と書かれています。これは王立農学校へ入学してまもなくの頃、1889年（明治22）の話なのですが、ちゃんとした試験を受けるのは生まれて初めてで、非常に難しいと述べています。また、書簡では「余は甚だ競争と成り、顔色甚だ黒くなり、如何となれば学校において戸外の授業多ければ也」と、農学校での戸外の授業で日焼けし、非常にたくましくなったことを楽しげに書き送っています。農学校では化学・理化学など、座学のほかに農業実習にも励んでいました。

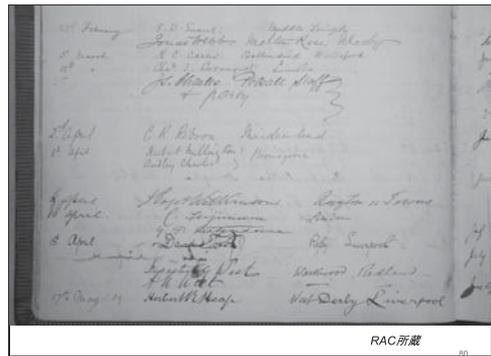
では、王立農学校の写真をご覧ください。現在も1845年の本部校舎など、創設当時の建物はそのまま残っております。これが正面玄関です。上の階は学生寮としてもまだ使用されていて、私も泊めてもらいました。大学の周りには小麦畑と牧場があり、馬や羊を見かけました。

お配りしたプリントの最後に、康荘さんの住んでいたサイレンセスターの町の地図をお載せしました（図2）。大概このような中世の町は、中心に教会があって、そして教会の前にマーケットプレイス（市場）があり、それを中心として商店や住宅街が広がっているという形です。マーケットプレイスには、市役所とか市民ホールなどもあります。教会の裏手の方は、当時は修道院とか貧しい人や旅行者のための安宿がありました。ローマ帝国はドーバー海峡を越えてイングランド地方まで侵出しましたが、その北限のローマの壁がこの街に残っています。サイレンセスターは中世に織物業で栄え、現在ある古い建物はビクトリア時代に建てられたものが多いようです。康荘さんが住んでいたキャンプデン・ハウスの建物もまだ残っていました。驚いたのは、キャンプデン・ハウスのあるシルバー通りは、教会の表に面した通りからほんの少し入ったとてもいい所だったことです。こんな感じの建物がまだ残っているというのがすごいですね。教会の裏手は、サイレンセスターパークという公園で、康荘さんがよく散歩をした所です。キンチ教授が住んでいた



家は、今現在はB & Bになっています。和訳すると民宿になりますが、中の装飾はビクトリア朝に可愛らしく統一されていて、日本人の宿泊客もあると聞きました。

王立農学校にはビジターズブック（来訪者名簿）が残されています。これが非常に貴重なもので、1889年の4月10日付で「Yasutaka Matudaira」と記入があり、康荘さんがロンドンから来訪しています。その上に、「Fujimura C」とあり、フジムラという者と一緒だったことがわかります。下の名前はCだから「チ」で始まる名前なのですが、福井関係者には見当たりません。おそらく、ロンドンからお伴した同学か、日本公使館関係の人ではないでしょうか。この他注目したいのは、1889年6月28日に来訪した沢野淳。この人は、明治26年に康荘さんが松平試農場を開いたと同じ年に東京西ヶ原に創設された最初の官立農事試験場の初代場長です。その沢野淳と同道しているのが、明治の老農として有名な林遠里です。この人は日本の伝統的な経験主義的農業を全国に広めたという点でも大変重要な人物です。伝統的な農業手法を実施しながらも、近代科学による農業にも関心を持ち視察に参加している、というのは日本近代農業の変遷を考える上で非常に興味深いです。この2人と一緒にやって来た山口権三郎という人は、新潟県で銀行を作ったり鉄道を作ったりいろんなことをやった人です。おそらく殖産興業の一貫として、英国式農業経営に注目していたのかもしれませんが。それから、田安家の徳川達孝さんも遊びに来ております。福井関係では、康荘さんの学事監督となった松本源太郎、武生出身で英国に留学していた斯波貞吉も来訪しています。日英博覧会が開催された明治43年（1910）には、東京帝国大学教となった佐々木忠次郎が来ております。このほか、キンチ教授を訪ねて、駒場農学校時代の教え子達が随分やって来ております。日本人の来訪者は戦前までに34名が数えられます。



康荘さんの英国農学修行の成果は何だったのかといいますと、やはり帰国後の松平試農場の創設といえます。福井城の跡地（福井市の真ん中）に果樹園を作った、農場を作ったというのは、高く評価されます。康荘さんが福井の産業として、養蚕と並んで果樹農業を発展させようという意気込みがここに感じられます。農場創設はもちろん松平康荘さんが直接やったものではないですが、欧米文化の受容だけではなく、例えば、康荘さんが日英博覧会に論文を出展した柿の研究のように、英国でも、欧州でも栽培していない日本の美味しい柿を紹介するというアイデアは康荘さんの発想ではなかったかと考えます。その意味において、松平試農場の創設は、海外留学の一番のお土産ではなかったかと思えます。他国修行のお土産として、康荘さんが持ち帰った近代的な科学分析に基づいた近代農業の伝統が、福井では今現在も受け継がれています。

### おわりに一世代を越えて引き継がれる他国修行の精神

幕末に制度化され組織化され、本格的に始められた福井藩の他国修行は、「普通ノ学」と称した文武のエリートのための教養を修得することを藩士子弟に奨励しました。幅広い学問を修得するというバランスの取れた他国修行は、さまざまな分野へ人材を送り出す基礎を構築したと思えます。なかで

も自然科学系の分野において基礎的な教育や観察を重視する姿勢が、世代を超えて引き継がれ、佐々木忠次郎や白井光太郎から、現在の南部陽一郎さんのノーベル賞受賞にまで繋がっていると、私は確信しております。

最近の若者はあまり外に出たがらないと言われますけれども、海外に出る・出ないに関係なく基礎的な教育、観察研究の精神、そして全く関係ない他藩の人と相互に情報を交換したり、親睦を図ったりして自分自身を社会化していく、このような福井藩の他国修行の精神を今後も引き継いでいってほしいと考えております。本日は予定より長くなってしまいましたけれども、ご清聴どうもありがとうございました。

### 史料翻刻：松平康莊関係書簡 2 通

#### 1 武田正規宛村田氏寿書簡（2月7日）明治10年か

\*「松平文庫」福井県立図書館保管

昨日は罷出候処、御陪食御懇待被仰付難有感戴仕候、陳は昨日も一応御談申候通、酒井<sup>下上</sup>良明 慶応義塾卒業生 昨午後水野行敏方へ来り、夫より弊廬へも尋呉候由ニ候得共、老拙留守申故、不能知其所預置、仍而今朝水野参り、一昨日同人へ頼置候次第調呉候哉相尋候処、酒井答ニ小倉小笠原家、金沢前田家等より、寄宿有之候得共其餘承り不申候趣、併し前田家ハ退塾相成当時参塾無之由、右之通ニ付而は、今般御入塾御頼被成候ニ付而之御見合セニ可相成程之御先柄も少キ事故、芳野へ御入塾之節之御例 其節御並方夫々御取扱振御調へニ相成候上ニモ候得は 二準シラレ、福沢先生夫婦第一等 芳野老夫婦ニ比すへき歟 と被成、和田夫婦ヲ第二等 芳野若夫婦ニ比すへき歟 と被成、外ニ生徒之世話スル女二人ハ猶八十瀬ニ準し、少し御加へ被成候歟、其他福沢僕婢等へ被下ニハ及申間敷歟、以上は愚老之談申上候間、可然御斟酌可被下候、扱又昨日酒井が水野へ申ニは、福沢先生ハ今般茲え入塾被成候共、矢張御下宿丈ハ近傍ニ御取被成候方御都合宜かるべく旨申聞候由 三菱会社之頭取岩崎之子共ハ一人ヲ付而如此致居候由 夜分御泊り等之都合ヲ初、御食用等之為ニも宜しかるべく、左ナケレハ俄ニ他之生徒一般之御振合ニ而ハ御慥被成兼之義ならん歟との懇ニ申居候由、右話之趣ハ福沢迄敢而老拙之伝言と申ニ而ハ無之、酒井迄物語之由、先日も申上候義ニハ候へ共、夜分御寝泊等之事迄ハ福沢も話シ無之事故、實際之模様も分り不申候、併し彼先生も懇ニ申居候事故、實際之模様ハ近日御出被成候節ハ一応篤と御取調被成、其上ニ而どちらニ而も御取極被成候方全かるべく奉存候、前件は今日早速参上、可申上心得ニは候得共、今日ハ御家人様方御寄合と承候ニ付、差扣、先一応以書面申上候、左様御承知可被下候、草々、拜具

二月七日 氏寿

正規様

追而御取込中貴答御断申上候也

#### 2 武田正規宛村田氏寿書簡（2月8日）明治10年か

\*「松平文庫」福井県立図書館保管

(封筒オモテ)

福田出取巻 本田出取  
翠峯

(封書ウラ)

福田出取 〇〇

昨日呈書之節詔落候ニ付、左ニ申上候、扱、福沢氏ノ酒井へ申聞候は、御下宿相成候節ハおまへか御世話申上候わん、御都合宜しからん、此義過日来心付不申との事、又おまへの為ニも此節寝泊中ニ候へハ、精々御世話申上候ハ、可然と申候由、其内御応接之節、自然右等之説話可有之も難計、仍而御心得迄ニ申上候○酒井云、岩崎之子供下宿料ハ附人之給料共二十円計の自費と水野之物語之由

以上二件、御心得の為申上候

二月八日 又〇

## 講演会配布資料

**史料 1** \* 出典：「旧福井藩学校諸規則」（松平文庫746）  
藩士等遊学ニ指出候義以前ハ無之候処、文久年間始メテ藩士八、九名ヲ選ヒ、航海学修業ノ為メ、藩費ヲ以テ指出候

**史料 2** \* 出典：「旧福井藩学制沿革取調書」（松平文庫747）  
弘化四丁未年七月、近来外国より覬覦之情実有之ニ付、従公辺も海防并武備之儀を屢々被仰出候たり、公兼て西洋砲術之皇国ニ勝れたる事を聞召せし故、かゝる御時節と申旁、当勤番御奉行西尾源太左衛門并召連悴十之丞其他拾余人、御旗本ニ於テ西洋砲術高島流師範下曾根金三郎殿へ入門、砲術及銃陣調練方伝習を被命

**史料 3**（安政 4 年 4 月） \* 出典：同前  
一、文武修行他国へ被指出候者、三人扶持ツ、被下之  
一、右同断罷出度并願候節ハ、当人兼て之志業厚ク御吟味之上願之通被仰付、勤無息共御手当金七兩ツ、被下

**史料 4** \* 出典：景岳会編『橋本景岳全集』上巻、1943年、252～253頁  
他国修業被仰付候者 定額三人扶持。

修業底出精之者は、半年或は一年程御見届之上、師家取扱等之義も、定額の外にて、御手当可被成下候。大器御造成之御見込を以て十五歳以上之者江、修業仰付られ候節は、定額二人扶持と御定に相成、師家取扱等之儀は、別に御手当被成下、可然哉。

右修業被仰付の者、修行底に係り候無抛入費 書籍購入、器械製作等 願出候は、御評議の上無利息拝借、又は御買上等に可被成下候哉。

当人十分之器には無之共、年若にも有之、家道も富有に有之、折角修業致候は、行末御用にも可相立、此表に罷在候ては種々指支有之、格別出精致兼候者、御内御移り等を以て修行罷出候者、修業中別段御手当には及可不申哉。

但し修行中格別出精或は致上達候者は、其節別段の御評議を以て、金五兩或は二人扶持位可被下哉。

修行願出候者 定額一人半扶持。

当人平生之芸術所業心得方等御吟味の上、御見込御座候者には、願被仰付候上にて、其人相当之一技取調、右練習等被仰付、別段御手当金三兩五兩被下可然哉。且又右取調候ニ付、無抛入費願出候は、御評議の上、無利息拝借、又は物に寄り其品御買上等可相成哉。

右御糺之処、平生不宜者に御座候て、修業罷在候趣意柄も、聡と致し不申者は、定額も被下候に及不申候事。

但し修業中逐々改心致勉勵候は、其時に至り定額丈被下可然哉。

右之外、非常の材御仕立之義は、自ら非常の御処置可有之、強ち定格に拘り難申奉存候。（後略）

**史料 5** \* 出典：「西周文書」180-3（国立国会図書館憲政資料室所蔵）  
他国修業生

一、学科見込相立可申候事

但、廿歳已下総て普通之学ニ可就義なれハ、一科専門修業致度節ハ試業を經、其才之所長顯然相見候上差許候事

一、何之学校ハ私塾なれハ、相手寄候人名相記シ可願候事

一、学費之義ハ、一切自分にて相弁シ可申候事

一、二十五ヶ月を以テ期限とし、学業之成否ニ拘らず一段帰藩、試業を可受候事

一、留学中三ヶ月壹度学校へ書翰差出、就業之規則考課之次第等委細可申出候事

一、帰藩試業之節学業格別進歩、尚又再度修業志願之輩ハ、学費を給し候義も可有之候事

一、留学中校塾之規則を犯し、或ハ遊冶放蕩学業怠惰之輩ハ不時帰藩被仰付、至当之御所置可有之候条、兼て相心得候事

史料 6

\* 出典：『日本教育史資料』第 2 帙、54~57 頁

沼津兵学校並びに附属小学校の教育内容

福井藩学校規条

沼津兵学校沿革(二)「二頁、沼津兵学校沿革(四)「三七、三八頁。 (表中、旧字体は改めた)	操	銃	馬	器	算	内	英	資	水	地	算	学	素	童	兵	武	字	学	中	体	学	字	書	外
	砲	方	画	学	学	一	語	業	練	理	術	書	説	生	砲	武	習	文	術	術	理	習	説	塾
生	銃	本	本	実	幾	点	話	史	講	術	加	伊	大	一	射	軍	講	銅	射	術	分	私	講	三
兵	ノ	源	源	地	何	開	會	書	職	乘	減	呂	学	級	軍	義	講	鑑	中	講	数	講	字	級
小	組	ノ	ノ	測	幾	平	話	史	談	馬	字	波	三	小	用	義	易	上	射	術	諸	積	上	級
隊	立	本	本	量	一	開	文	論	講	乘	片	孝	字	學	軍	學	知	級	砲	術	等	小	級	級
並	等	源	源	フ	平	立	典	講	職	除	敦	經	級	講	用	用	録	中	砲	術	難	學	級	級
二	打	ノ	ノ	テ	面	マ	文	講	談	皇	私	論	二	開	撤	義	南	級	砲	術	題	小	級	級
大	等	本	本	式	テ	典	職	談	國	用	五	級	平	兵	學	木	中	砲	術	題	學	級	級	
砲	交	源	源	ル	マ	マ	典	談	談	皇	文	級	三	規	運	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
台	交	ノ	ノ	セ	テ	テ	典	談	談	國	章	級	一	矩	動	義	史	初	砲	術	題	學	級	級
二	交	本	本	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	小	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級	
頁	交	源	源	ル	式	式	典	談	談	國	章	級	一	初	隊	義	史	初	砲	術	題	學	級	級
	交	ノ	ノ	シ	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	野	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	オ	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	戰	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	ノ	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	術	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	学	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	の	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	大	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	ノ	ノ	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	本	本	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	典	義	朝	級	砲	術	題	小	級	級
	交	源	源	略	式	式	典	談	談	皇	章	級	一	初	文	義	朝	級	砲	術	題	小</		

史料9 (明治2年10月)

\*出典：同前、180-5

目録

永見裕

八両壹歩壹朱

銀八匁三分五厘

此錢 貳百五拾文

壹ヶ年五十兩已下之割

二月三月二ヶ月分

永見裕

本多貴一

松平八十一

津田捨五郎

松原平

明石源藏

貳百兩壹歩

正月 三月迄日数

八十九日分一日壹人

壹分貳朱ツ、已下

坂野秀三郎

貳十貳兩壹歩

右同断一日壹歩ツ、已下

メ貳百貳拾貳兩貳歩

錢貳百五十文

史料10 (明治2年10月)

\*出典：同前、180-2

私義今般兵学修業被仰付難有奉存候、就ては先達て被仰出候御規則は勿論、当御藩学校掟書之通堅相守、誓て違背不仕日夜勉勵修業仕候 以上

巳十月 松原平 印

史料11 坂野秀三郎履歴

\*出典：「新番格以下諸下代迄」(松平文庫926)

弥藤次悱

坂埜 秀三郎

秀雄 (朱書)

慶応元年閏五月十一日、外塾師手伝被仰付

一、同年六月十六日、不慎之趣有之ニ付押込、七月七日指免、但、右ニ付外塾師手伝御免

一、同年八月廿四日、外塾師手伝被仰付

一、明治二巳九月二日、洋学所定詰典籍方御雇兼申付、月俸二匁被下候事

一、同月晦日、沼津兵学校え修行罷越候様被仰付、十月五日出立

一、同三午正月十四日、沼津校にて進級ニ付、修業生同様之御取扱被成下候様

一、同年七月廿四日、小給之者格別勉勵之趣ニ付、為手当金貳十五兩被下候事

一、同年閏十月五日、沼津学校え修行罷越候処、御都合ニ寄歸藩可致候、十一月十七日歸着

一、同年十一月廿四日、今度試業之処追々進業ニ付再沼津校え修行被遣候、厚可致勉勵候事、十二月六日出立

但、来未十月歸藩之事

一、同四未十一月廿五日、沼津兵学校修行申付候処、進業ニ付、金三百疋被下候事

- 一、同年十二月十六日、任四等教授、洋学
- 一、同五申七月、秀三郎事秀雄
- 一、明治六年六月廿三日、父弥藤次老年ニ付家督

**資料12** グリフィス「日本における科学」 \* 出典：W. E. Griffis, Science in Japan, Nature, Vol. 6, 352 (1872)  
 日本で物理科学を教えるには、最も初歩の基礎から始める必要があります。何でも目の前でやって見せて説明し、占星術や中国風の哲学やその他もろもろのことが、いかに馬鹿げているかを知らしめるのであります。学生たちはなかなか知性があり、この国の教育に最も不足している部分をやがて満たしてくれる、つまり優秀な教師となってくれるものと大いに期待されます。

**資料13** 団野確爾 \* 出典：拙著、220頁  
 明治3（1870）年において24歳、代々柔術師範を勤めてきた家柄であったが、「士族ノ後世見込無キヲ曉リ婦農ニ志」て、明治2年12月に土着を願ひ出た。翌3年福井の南の荒れ地に土着し、自作を営んでいたが、同年由利公正の警衛として上京した際に、築地牛馬会社の主任に牛乳搾取法や製乳法を習い、さらに横浜在住の英国人にも伝習を受け、洋牛を購入して帰郷し福井市内で牛乳販売業を開いた。当時牛乳販売はまだ普及しておらず、経済的な困難に陥り事業は失敗に終わったが、1878（明治9）年に敦賀県勧業課長の協力を得て、福井毛矢町に植物試験場と牧畜場を設け、これが後の交同社の基礎となった。その後牧畜業に励み、1881（明治14）年には牛乳販売を勉強して福井市内で再び事業を起こした。

**史料14** 中根雪江・鳥介 \* 出典：「永見裕宛中根雪江書簡」（明治3年12月24日）前掲「西周文書」177-9  
 先達而坂野、若代、杉田等学校ニテ之試業之様子定て御聞及び二も可有御座候、寔ニ嚴重成事ニ有之候由、図マテ書セ候由、流石ニ坂野ハ課目滞碍無之、若代ハ一二事トカ、杉田ハ余程有之、算術杯ハ惣て滞り候トカ申事、夫ハ兎も角も坂野等モ此表ニテ中等ニハ超へ不申トノ批評ノ由、僅ニ一課目ヲ専修ノ者ト数課目具備ノ者ト同日ノ論ニハ無之、唯吾顔ニ付キタル墨ハ見へ不申、笑止千万ノ事ニ御座候、如貴説実学ナキ時ハ外誘ニ惑ヒ候ハ当り前、翻訳書ヤ聞キアヤカリノ改革ハ詰ル処如何相成候事ト老情杞憂ニ候、中々変化最中ノ様子、是ハ吾藩而已ナラス大政モ同断ナリ、（中略）古今革命ノ世代ニハ前代ノ善政良法ヲ斟酌シ、旧弊ヲ除キ、民心下情ヲ暢達候事一轍形成ナルヲ、所謂今ノ一新ナル者ハ、二百年來至治ヲ致シタル、良善ヲ極メタル、徳川氏ノ政法ヲ陳述トシテ不論、善悪廃止シ、天下ヲ手ニ掛タ事モナキ長袖公家や陪臣者浪人輩ノ、是迄傍觀シテヤッテ見タク思ヒシ私智権略ヲ用ヒ、何事モ是迄ノ制度ハ旧弊ノト片付ケ、思出シ次第珍ラシキ新法ヲ行ヒカケ候故、如此体ナリ、四季ノ順序モナク、秋ノ落葉面白カラズト、俄ニ春花ニ返サントスルカ如シ、秋モ冬ヲ経テ春ニ移ルハ順ナリ、是ヲ夏ノ方ヨリ春ニ戻サントスルハ無理ナリ、見ルヘシ、都下風俗ノ頹敗旧弊ト斥ス、徳川氏ノ時ヨリ幾段ノ弊ヲ長セシヤ、長大息ノ至リナリ、悪シキ事マテ西洋風ヲナラヒ、日本魂ヲ失ヒ候爲体、西洋人ノ笑具ト存シラレ候、就テモ、次男等モ貴示ノ実学ヲ勤メ、日本魂ヲ遺却不仕候様御教誨相頼候、秉彝ノ心術ヲ離レ候テハ万業成就スルトモ、惣テ無益ト存候

**資料15** 佐々木長淳・忠次郎  
 佐々木長淳 \* 出典：長野栄俊「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」（『若越郷土研究』52巻2号、2007年）30頁  
 文政13（1830）年9月3日、福井藩士佐々木小左衛門長恭の長男に生れる。幕末の福井藩で主に技術官僚として軍事・軍制改革に取り組み、兵器・弾薬・船舶の製造や築港工事に携わる。維新後は新政府に出仕し、農政実務官僚として養蚕・製糸・紡績等の分野で大きな功績を残した。大正5（1916）年没。

佐々木忠次郎（モースに従い、大森貝塚を発掘／きょう蛆の生活史／微粒子病の研究など。1889～1891年に養蚕及び水産術研究のため欧米留学した） \* 出典：「日本の養蚕技術を確立した親子リレー 佐々木長淳・忠次郎」（西尾敏彦『農業技術を創った人たちⅡ』家の光協会、2003年、54、57頁

長淳のころざしは長男の忠次郎によって引き継がれた。忠次郎は幼名を忠二郎という。安政4年(1857)に福井で生まれたが、父の工部省勸工寮出仕にともない、14歳の明治4年(1871)に上京している。明治10年(1877)には、創設されたばかりの東京大学理学部に入学し、モースの教えを受けるようになった。・・・大学卒業後、駒場農学校・東京農林学校で教鞭をとったのち、東京大学養蚕学教室の初代教授に迎えられた。やはり父親の影響が大きかったのだろう。ちょうど我が国の養蚕学や害虫学が学問としての体系を形づくりつつある時期である。忠次郎は以後、これらの学問の体系化に尽力し、この国の農業技術史にその名を残すことになった。・・・当時の昆虫研究者の多くが、もっぱら採集した成虫の標本作製、分類や解剖に終始していたのに反し、彼の研究は観察に裏づけられていた。我が国における昆虫生態学・応用昆虫学は、彼によってはじめて幕が切って落とされたといつてよい。・・・昭和13年(1938)没。

**資料16** 白井久人・白井光太郎

白井光太郎(イネのいもち病など、植物病理を研究。明治32年から34年までドイツ留学) \*出典:柳沢美美子「福井藩菓鴨下屋敷のリングをめぐって」(『福井県文書館研究紀要』第7号、2010年)75頁、注1

白井光太郎は、1886年(明治19)東京大学理科大学を卒業後、ドイツへ留学、1906年東京帝国大学教授となり、日本の植物病理学の発展に大きく貢献した。白井は福井藩士白井幾太郎(久人)の長男として1863年(文久3)福井藩の霊岸島下屋敷に生まれた。父は1857年(安政5)8月以降、松平慶永(春嶽)の附小姓となり1972年(明治5)まで慶永附近習頭取、内務局頭取、執事等を務め、慶永の側近にあった。

\*出典:山田昌雄「白井光太郎と福井県出身の植物病理学者達、その時代」(『若越郷土研究』53巻1号、2008年)

白井は明治19年7月、大谷津直麿と共に帝国理科大学植物学科の最初の卒業生になった。・・・卒業論文は「東京及びその近郊の蘚類」であった。卒業の翌年である明治20年(1887)に創刊された植物学雑誌の第1巻第1号に掲載された苔蘚発生実験記は、その要約と思われる。小野蘭山、宇田川榕庵など、我が国の9名の本草学者の名を挙げ、彼らの陰花植物研究について述べていて、この序文において早くも白井の本草研究への情熱と見識が読み取れる。

**史料17** \*出典:拙稿「松平康荘の英国農業留学」162頁(明治17年2月13日付福井新聞)

華族従五位松平康荘君(十八才)は、兵学修業として三年間独逸国に留学さるゝ、為来る十六日大山陸軍卿の一行と共に発航さるゝに付、去る二日参内拜謁仰付られ天盃を賜はりたり○右に就ては三日康荘君并橋本軍医監其他遊学生岩佐新、橋本春、天方通義の諸氏を送る為め在京の福井県有志者百余名江東中村楼に会して送別の宴を開きたり・・・(康荘の答辞)不詳康荘敢て謹テ 朝旨ノアル所ト諸君ノ啓沃及祖父ノ嚴父ノ慈訓トヲ体シ躍然欧州ニ航シ陸軍ノ学ニ従事セントス・・・只管研精進取ノ志ヲ励マシ忍耐恒久ノ力ヲ養ヒ万一二学成リ業熟シ涓滴ノ国家ニ報ヒ併セテ諸君切悃ノ友誼ニ負カサルヲ得ハ生カ光榮何事カ之ニ加ヘン、庶幾クハ他日期満千婦朝ニ至ルノ際各位ノ清泰ヲ賀シ且今日懇待ノ厚意ニ答ヘン

**史料18** \*出典:同前、165頁(「家譜 茂昭公」249、明治19年12月9日条)

独乙国在勤品川満次郎殿公使、小松原英太郎書記官、及び英国在留八田裕次郎え書翰を發せらる、康荘君洋行後独乙国伯林陸軍予備校 ドクトルラルフス、フリバートミリテーマ、シューレ に於て修学せられしか、都合により更に英国王室設立サイレンセスター農学校 ロアヤル、アグリカルチュラル、コレツヂサイレンセスター に転して修学せらるゝ事となりし故、品川殿及び小松原江ハ是迄配慮ありし謝辞を申入れ、八田ハ去る三日電信を以て今後の学事相談を依頼せられ、今又郵書を以て依頼せられしなり

**史料19** \*出典:同前、164頁(明治22年5月29日付福井新報)

松本源太郎は元福井藩主松平侯爵の令息康荘君(在英京倫敦府)が留学を啓沃輔導せんが為め、同家お依頼により四月二十八日解纜の汽船にて英京倫敦へ赴きたり、同氏夙に文科大學撰科にありて哲学を専修したる士なれば彼地へ着の上は『カムブリツヂ』大学に入りて深く哲学の蘊奥を研修することなるべし

資料20

\* 出典：同前、165頁（『福沢諭吉全集』17、岩波書店、611、642～644、686頁）

1883年（明治16）に二人の息子を米国へ留学させた福沢諭吉は、数学の苦手な長男には農学修行を勧め、自から三田育種場長池田謙蔵に農業に関する話を聞き、将来の日本にとって果樹培養が有益である旨長男に書き送っている。また、「真成の学者たらんには一度英国を踏むこと緊要なり」と述べ、英国の学問を高く評価している。

表1 幕末における私塾修行（蘭学／医学・兵学）

華岡青洲・春林軒（門人1,288名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1	寛政9年閏7月2日	石堂鼎			越前
2	文化13年正月22日	岩佐玄桂			越前福井家中
3	文化15年5月12日	橋本春貞			越前福井家中
4	天保3年9月3日	栗山寛蔵			越前三国
5	天保3年正月15日	加藤周益			越前福井藩中
6	天保4年5月6日	栗崎良叔			越前福井藩中
7	天保15年2月20日	田中図書			越前福井
8	嘉永4年7月24日	橋本左内			越前福井藩中
9	安政3年4月	八木徹造			越前三国
10	安政2年8月18日	大橋玄樹			越前福井藩
11	文化元年	今井才蔵			若狭小浜
12	文化元年	吉井文桂			若狭小浜福岡町
13	文化8年11月16日	吉井文吾			若狭小浜福岡町
14	文化11年正月11日	近藤恕庵			若狭小浜福岡町
15	文政9年2月27日	吉井文圭			若狭小浜福岡町
16	文政13年3月14日	人見周輔			若狭大飯郡高浜
17	天保9年正月25日	松山新次			若狭小浜藩
18	天保12年正月23日	吉井恕輔			若狭竹原家中
19	弘化4年3月27日	中堂敬輔			若狭小浜家中
20	安政2年2月25日	杉谷崇敬			若狭大飯郡石山村
21	文化10年2月1日	神山勇齋			越前南条郡牧上村
22	文政4年5月24日	窪田哲斎			越前鯖江間鍋下総守家中
23	天保5年7月27日	谷三宜			越前勝山小笠原相模守中
24	弘化3年9月1日	福岡謙蔵			越前今立郡下新庄村
25	安政6年10月8日	加藤龍庵			越前大野郡木本領家村

出典：「華岡青洲先生春林軒門人録」、呉秀三『華岡青洲先生及其外科』思文閣、1971年

伊東玄朴・象先堂（門人406名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1		半井玄沖			越前福井藩
2	安政6年2月	山崎良鶴			越州府中
3		村松鑿次郎			若狭小浜藩
4		飯塚寛造			越前丸岡藩
5		土屋得所			越前鯖江藩
6		岩井浪安			越前敦賀藩
7	嘉永7年閏7月3日	林雲溪			土井能登守藩（大野藩）
8	嘉永7年9月	吉田拙蔵			土井能登守藩（大野藩）
9	安政3年6月	加藤文進			越前鯖江藩
10	万延2年2月	大鈴驒治			越前鯖江藩

出典：「門人姓名録」、伊東栄『伊東玄朴傳』玄文社、1916年

広瀬元恭・時習堂（門人355名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1	嘉永4年2月	瀬戸良伯			越前府中糠浦住
2		石田快助			越前府中
3	文久元年9月	服部一郎			越前福井
4	元治元年3月	山田道忠			越前福井
5	弘化4年晩春9日	林雲溪			越前大野藩
6	嘉永4年8月朔日	武田周伯			越前丹生郡荻原村
7	嘉永7年2月	鈴木力之助			越前敦賀
8		藤井慎斎			越前四ヶ浦
9	安政3年5月	京藤良甫			越前今城
10	安政6年冬	木下東作			若州藩中
11	文久元年	松本造作			越前鯖江
12	慶応4年閏4月11日	山内謙助			丸岡藩

出典：「時習堂弟子籍」、京都府医師会医学史編纂室編『京都の医学史資料編』思文閣出版、1980年

緒方洪庵・適塾（門人639名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1	嘉永元年夏	蒔田良哉			越前福井
2	嘉永元年	田中禎輔			越前州福井
3	嘉永3年晩春	橋本左内			越州福井藩
4	嘉永4年8月	宮永勤斎			越前福井
5	嘉永4年8月	笠原健蔵			越前福井
6	嘉永5年夏	宮永良山			越前福井
7	安政3年6月25日	斎藤策順			越前府中
8	安政6年7月21日	宮永実吉			南越前福井藩医
9	万延元年8月2日	宮永典常			越州福井
10	万延元年9月2日	石田快介			越前府中

出典：「適々齋塾姓名録」、緒方富雄編著『緒方洪庵適々齋塾姓名録』学校教育研究所、1967年

佐久間象山・象山塾（門人467名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1	安政元年正月12日	橋本左内			
		大野藩29名			
		勝山藩9名			
		丸岡藩1名			
		小浜藩1名			

出典：青木歳幸「佐久間象山門人録『及門録』再考」（『信濃』第48巻第7号、信濃史学会、1996年）

大村益次郎・鳩居堂塾（門人160名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1	安政6年末	加賀九郎次郎			越前福井藩
2	3月4日	岡田耕次			間部下総守家中

「弟子籍」（大村益次郎先生伝記刊行会編「大村益次郎」馨書房、1944年）

佐藤泰然・佐倉順天堂（門人99名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1		大岩貫一			越前福井藩
2		妻木立斎			越前福井藩
3		野村信平			越前福井藩
4		勝澤一字			越前福井藩
5		星野道の			越前福井藩
6		山本淳良			越前福井藩
7		蘆野三省			越前福井藩
8		渡辺静寿			越前府中藩
9		佐藤宗逸			越前府中藩
10		土屋裕堂			越前鯖江藩
11		中村斎			越前大野藩
12		土田礼造			越前大野藩
13		木原逸斎			越前勝山藩
14		三竹善民			越前勝山
15		山岸良周			越前鯖江
16		橋良玄			越前鯖江

出典：順天堂大学医学史研究室所蔵『佐倉順天堂社中姓名録』佐倉市教育委員会文化課、1992年

大槻玄沢・芝蘭堂（門人94名中）

	入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1	享和3年11月朔日	西島俊庵			間部下総守家中

「大槻家門人帳」（板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館、1959年）

表1-2 幕末維新时期における私塾修行（儒学・古道学・英学・政事学）

福井藩の平田篤胤・気吹舎塾門人

入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1 天保9年5月10日	中根鞠負	32		
2 天保9年12月24日	篠原長次郎	40	中根鞠負	=敦行
3 天保12年3月15日	久世愿五郎	25	中根鞠負	
4 天保12年6月16日	杉浦金太郎	31	中根鞠負	=幸右衛門
5 天保14年7月17日	平本作野右衛門	一	篠原敦行	=平学
6 文久2年4月28日	佐々木要之介	29	中根鞠負	=久波紫=千尋
7 慶応2年11月27日	芳賀芳之助	26	佐々木久波紫	
8 慶応4年閏4月25日	粕谷治大夫	33	中根鞠負	
9 慶応3年5月	渡辺式部	26	粕谷良度	
10 慶応4年5月16日	村上丈太郎	33	粕谷良度	
11 明治2年3月1日	井手佳太郎	24		
12 明治2年3月4日	米岡市郎	29		
13 明治3年4月4日	岩佐 資	24		
14 明治3年4月10日	牧野四郎	22	粕谷良度	

「誓詞帳」「門人姓名録」『新修 平田篤胤全集 別巻』名著出版、1981年）

広瀬淡窓・咸宜園（門人4,617名中）

入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1 文化13年10月1日	釋 大巖		徳善寺頭杖	越前足羽郡福井開光寺
2 嘉永7年10月3日	佐々木良齋	26	謙之助	越前府中。同性音齋仲
3 安政5年4月10日	竺 玄齋	21	睦州	越前足羽郡福井城下 華嚴寺徒
4 (安政6年6月)	高木太郎八			越前府中藩
5	松井耕齋			同所
6	小林清作			越前岩本
7	小林作兵衛			同所
8 (安政6年9月)	竹内清華			越前福井木田町 俗称治治
9 安政6年10月	内田要太郎			越前三国港
10	左右善右衛門			
11	内田惣右衛門			
12	加納文右衛門			
13 天保13年1月20日	宮川祐吉	19	吉田有秋	越前丸岡藩
14 弘化4年12月27日	浄園寺雄山	20	縫屋善五郎	越前今立郡東庄境村
15 嘉永3年8月	矢田與三右衛門			越前国大野
16 安政6年6月	今郷 公龍			越前敦賀
17 安政6年7月	広瀬與三右衛門			同国大野郡外園村
18	同性啓藏			同
19 安政6年7月	松原喜作			越前大野郡土打村
20	宮澤由左衛門			同大野
21	加藤九左衛門			同所
22 安政6年9月	安田桃之助			越前勝山藩
23	小笠原立也			
24	船屋三郎			
25	長谷川外波			
26	前野菊次郎			
27	岡部鶴鶴			
28	日比謙藏			
29	岩佐半藏			
30	近藤與平			同
31	中村倉吉			
32	大濃三右衛門			越前丸岡
33 文久3年4月22日	釋 良巖	27	児島長年	越前今立郡定友村 唯賢寺徒
34 元治元年10月2日	即 定	28	釋 大珍	越前敦賀郡長賢寺
35 明治2年1月25日	釋 舜譚	19	釋普寂 寂後屋圓藏	越前今立郡五ヶ村 唯賢寺

出典：日田郡教育会編『淡窓全集 下巻』1927年（早稲田大学高田早苗研究図書館所蔵）

福澤諭吉・慶応義塾入学者（明治4年迄）

入門年月日	氏名	年齢	入社証人	備考
1 元治元年6月24日	久保郁純介			越藩
2 慶応元年11月5日	佐藤宗邊			本多與之輔内
3 慶応元年11月5日	渡邊静壽			洪基、本多與之輔家来
4 慶応2年2月12日	柳木直太郎			松平越前守家来
5 慶応2年7月15日	石川尚一郎			松平越前守内
6 慶応3年正月	岡部八男雄			越藩
7 慶応3年2月1日	斎藤良程			越州
8 慶応3年3月1日	柴山長太郎			松平越前守家来
9 明治3年1月17日	堀田統一郎			(生国) 越前 (住所) 高輪
10 明治3年5月16日	青山元助	14		(生国) 越前 (住所) 東京
11 明治4年7月18日	松平麟也	19	鈴木琢二	(府藩県) 福井県 (住所) 芝増上寺内石川武蔵司大佑同居
12 明治4年7月28日	伊藤勉之介	18	香西成	(府藩県) 福井県 (住所) 三田老丁目釜屋藤助
13 明治4年10月28日	稲葉俊之助	18	岡本晋	(府藩県) 福井県
14 明治4年11月8日	稲葉文雄	21	岡本晋	(府藩県) 福井県
15 明治4年11月23日	玉村國平	19	岡本新四郎	(府藩県) 福井県 (住所) 東京府邸内玉村節介同居
16 元治2年2月1日	篠島周介			土井能登守家来
17 慶応元年11月4日	平泉泰造			土井能登守内
18 慶応3年11月5日	前田仙溪			土井能登守内
19 慶応3年12月3日	梶川虎馬			酒井若狭守藩
20 慶応3年12月3日	井汲新太郎			酒井若狭守藩
21 明治2年5月9日	小島鏡三郎	22		(生国) 若州 (住所) 牛込矢来屋敷
22 明治3年3月16日	近藤鉄吉	23		(生国) 越前 (住所) 鯖江
23 明治3年4月21日	小倉周藏	21		(生国) 越前 (住所) 鯖江

出典：福沢研究センター編『慶応義塾入社帳』第一巻、慶応義塾、1986年

西周・育英舎門人

入門年月日	氏名	年齢	紹介者	備考
1 (明治3年11月)	永見裕			福井藩 (沼津から)
2 (明治3年11月)	松平八十一			福井藩 (沼津から)
3 (明治3年11月)	中根西一			福井藩 (沼津から)
4 (明治3年11月)	津田 東			福井藩 (沼津から)
5 (明治3年11月)	松原 平			福井藩 (沼津から)
6 (明治3年11月)	明石源藏			福井藩 (沼津から)

出典：「育英舎則」、『西周全集 第二巻』宗高書房、1962年

表2 福井藩員外生

氏名	年齢	家督者の関係・家督者名等	留学期間	前職	遊学中の経歴・褒賞	遊学後の主な経歴	出典
永見 裕	33	弟・要人 (300 石・門警衛)	M2.10～M3.9	兵学取調方 (5 口)	修業生徒寮長・藩手当 1 ヶ年 50 両	西周私塾育英舎、兵部省出仕、山形県小学校教員、学力検定掛、酒田高等尋常小学校校長	①②
本多勝三郎 (貴一)	20	本人・1200 石 (分家) (父修理・高知席 2800 石・元家老)	M2.10～M3.5	修業隊		慶永思石により東京でフルベッキに師事、その後神戸へ	③⑥
本多英雄 (範)	20#	本人・1975 石・明新館生長	M2.10～M2.11	生長、修業隊	M2.11 帰藩、12 被免	東京へ学問修行	③⑥
松原 平 (秀成)	18	悖・十郎 (300 石・民政寮山林方・小隊長)	M2.10～M3.10		学業格別 20 両・第 6 期資業生	育英舎、新潟英学校教員、横浜へ Herald 新聞社社員、福井中学英語教員、私塾研成義塾 (英教漢)、福岡師範学校教員	③⑥⑦⑧⑨⑬
杉田説三郎 ※	21	本人・米 316.399 俵	M2.11～M4	修業隊	M3.11 一旦帰藩・第 7 期資業生		③⑦⑩
市村深造 ※	19	次男・市十郎 (350 石・学校幹事、軍政局幹事、軍監) 卒族	M3.10? ～M4	修業隊		東京へ洋学修行	②⑩
若代連藏 (佐久間正)	22#	悖・老之助 (米 46.426 俵、元武生家来 <70 石・引渡席)	M2.10～M4		学業格別 20 両、M3.11 一旦帰藩進業二付金 200 疋、第 6 期資業生	明新館洋学四等教授、准三等教授、福井中学英語教員、同校長心得兼務、文官普通試験委員、県教育会理事、第五十七銀行頭取、越前笏谷石材株式会社社長	②⑥⑪⑫⑬
津田捨五郎 (東)	20	弟・達太郎 (230 石・後拒)	M2.10～M3.1		学業格別 20 両・第 6 期資業生	育英舎入塾	②⑥⑦
中根鳥介 (西一)	16	弟・牛介 (700 石・砲隊長) (父雪江・寄合席・元側用人)	M2.10～M3.10			育英舎入塾、その後北海道へ	②⑭
松平八十一 (正秀)	22	弟・源太郎 (寄合席 500 石小参事・民政寮幹事)	M2.10～M3.10	修業隊	学業格別 20 両	育英舎入塾	②⑥⑦
明石源藏	18	弟・雄太郎 (100 石・兵学取調方歩兵佐教)	M2.10～M3.10	修業隊・生兵教授方手伝		育英舎入塾、明新館洋学教授方手伝、福井中学英語教員	②⑥⑬
木滑貫人	22	弟・青木威一 (米 82.121 俵、武学所少訓導、兵学取調方)	M2.10～M2.11		M2.11 帰藩、12 被免	明新館員外洋学中進業生、通訳、米国留学	②⑦⑮
加賀升讓 ※			?～M4				⑩
糟谷素且	21#		M2.10～?				⑥
坂野秀三郎 ※	25#	悖・弥藤次 (新番格以下・小銃隊)	M2.10～M4	外塾師手伝、洋学所御雇	格別 勉 励 25 両 M3.11 一旦帰藩進業二付 300 疋、第 5 期資業生	明新館洋学四等教授、その後名古屋で弁護士	⑤⑥⑦⑩
斎藤修一郎	16	本人・米 30.182 俵・卒族 (武生本多興之輔元家来)	M3.2? ～M3.10			育英舎入塾、大学南校貢進生、ハーバード大学官費留学、外務省勤務、農商務次官、朝鮮国政府農商務顧問 (正四位)	④②⑯

年齢・家督は明治 3 年現在。#は資料④によるもので、明治 2 年 11 月頃か。※は資料により氏名が異なるもの。

杉田悦三郎、市村深造、坂野秀太郎、加賀野升讓 (砲兵訓導)。

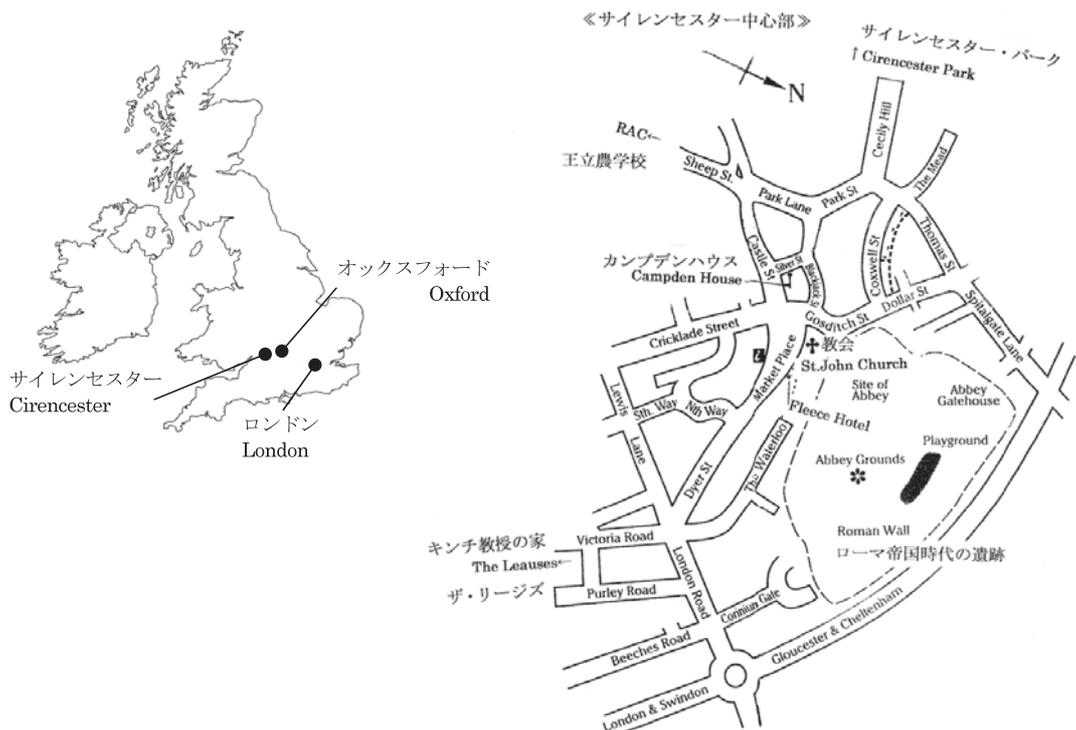
出典：①「永見裕履歴」(西周文書)、②「子弟輩」一～三、③「士族」一～七、④「元陪臣」、⑤「新番格以下増補雑輩」(以上、松平文庫福井藩史料)、⑥「福井藩留学生名簿」(『西周全集』第三卷) ⑦「沼津兵学校沿革」(『同方会誌』42 号)、⑧「福井新聞」1884 年 9 月 10 日、12 月 10 日、⑨「子供勤書」(熊取正光氏所蔵)、⑩「家譜」235 (越葵文庫、福井市立郷土博物館保管)、⑪『武生郷友会誌』29 号 (武生市立図書館蔵)、⑫『武生市史』資料編、⑬「旧職員表」(『創立 50 周年記念録』福井県立福井中学校、1931 年)、⑭「家系図」(中根隆氏所蔵)、⑮前掲「家譜」236、⑯『斎藤修一郎先生懐旧談』(武生郷友会、1917 年、早稲田大学中央図書館所蔵)

図1 明治初年静岡藩および慶応義塾による教師派遣

\* 出典：拙著『幕末維新期における教育の近代化に関する研究』、152頁



図2 サイレンセスター中心部 康荘下宿カンペンハウス



“The Cirencester Experience”（1998年、pp. 18-19）から作成